



2013. May
第 10 号

日本演出者協会 協会誌「ディー」

題字 千田是也

新劇の代表的演出家・千田是也氏の文字をロゴデザインに使用。

(資料提供／早稲田大学坪内博士記念演劇博物館)

特別対談『三流の芝居をつくろう。』 福田善之 × 永井愛

Contents ■■

■特別対談

福田善之 × 永井愛「三流の芝居をつくろう。」…… 2

■若手演出家コンクール…… 5

■演劇CAMP in 中津川…… 8

■若手演出家コンクール(前年度)最優秀者公演…… 9

■演劇大学(演出家・俳優養成セミナー)…… 10

■国際演劇交流セミナー2012…… 13

■日本の近代戯曲研修セミナー2012…… 14

■各地域活動通信…… 15

■アンケート「演出者の仕事」…… 16

■理事会報告…… 17

■部会だより…… 18

■韓国現代戯曲ドラマリーディング報告…… 18

■新入会員紹介…… 19

■退会・訃報…… 19

■事業担当…… 19

■データに見る国際演劇交流セミナーの歴史…… 20

■編集後記…… 20

日本演出者協会誌「D」(ディー) 第10号 定価＝無料 2013年5月1日発行 平成20年11月創刊(毎年2回発行)

【発行人】和田喜夫(理事長) 【編集人】篠崎光正(広報部長) 【編集委員】篠本賢一・三谷麻里子・小川功治朗・大杉良・緑川憲仁・秋葉由美子
【インタビュー編集】鷲谷憲樹 【発行所】日本演出者協会 東京都新宿区西新宿6丁目12番30号 芸能花伝舎3F(〒160-0023) 電話03-5909-3074
【編集・制作】日本演出者協会広報部協会誌「D」編集委員会 【題字】千田是也「Marionetto」より 【印刷所】有限会社一光堂印刷
【表紙デザイン】前嶋のの 【本文デザイン】奥秋圭



演出家・劇作家
福田善之

劇作家・演出家 二兎社主宰
永井愛

三流の芝居をつくろう。

▼作・演出家の視線

——おふたりとも「作・演出」ということをしていられっしやいます。作・演出となると、たとえば劇作の段階でもすでに頭の中で演出をされてる場合があったりするのでしょうか。作・演出と演出のみの違いはどのようなものなのでしょうか。まず、劇作と演出で、自分はどっちが優先だったってことありますか。

福田■演出です。というか、演出と一体として考えております。作、演出を一体として考えている。なるほど。

福田■それはいい面もありますけど悪い面もあるのよ。ひとのホンで演出を頼まれたときに台詞を変えなくなっちゃう。それはやっぱりまずいよね、あはは。変えなかつたけどね。

永井■優先というふうに考えたことはなかったですけど。演出家っていろんな作品を演出するわけだから、ある作品を演

出しているときに、他の作品の演出イメージを思い浮かべたり、絵を見に行っても道を歩いても、常に演出という立場からいろんな発想を得るんじゃないでしょうか。そういう意味では、やはり私は劇作家ですね。自分の作品はどうしても演出したいんですけど、道を歩いているときは、たぶん劇作家目線。人がおもしろいこと言ったらこの言葉を書いておこうとか、新聞を読んで、あ、これを芝居にしようとか、そういう場合は、つまり劇作をしようと考えているんです。

福田■僕は今現在は、道歩いていって言い方っていうのも演出家です。そうやってきた起因はいろいろあるんですよ。それをしゃべればいいかなと思ってた。人を傷つけない範囲でね（笑）。ゲームなのいるんだもの、昔はね。大劇団に所属してさえいけばやれたみたいなの大勢いたわけだからさ。大きな顔してるんだよね。自由に書きたまえ、こっちはプロだから、って。いざ稽古入ってみたらなにもできない。

演出家には二種類ある。

演出だけをする者と、みずから劇作もする者だ。

両者に違いがあるとしたらそれはどのようなものなのか。

福田善之、永井愛両氏のお話は

「作・演出」の意識から作劇の本質に触れていく。

対談：三流の芝居をつくろう。 福田善之 × 永井愛

永井■演出を考えて台本を書くかって言えば、最終形を考えてるわけじゃないですね。まだどんな装置になるかもわからないし、動きもいろんな可能性を残しておきたい。ただ、物言いに関しては、このリズム、この調子でこの台詞は言ってほしいとか、相手を向いて言うか向かないで言うか、そういうことは計算に入れますね。で、自分で演出したときに、あ、そうじゃなくてもいいんだってわかったりもするけれど、何かを固定していかないと次に進まない。その時点での仮止めで必要じゃないですか。仮止めの意味での演出っていうのは、たぶん演出をしない劇作家であっても考えて書いていると思います。先日たまたま、井上ひさしさんの戯曲をまとめて読む機会があったんですけど「この人が喋っているときに他の人たちが手持ち無沙汰になる可能性がある。そうならないような動きをつけておこう」というような、すごく演出的な配慮がなされているなと思いました。

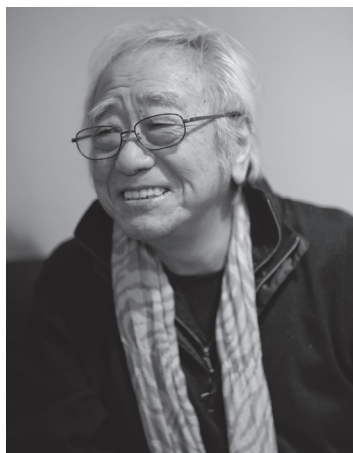
——現実に出ると稽古の中でもいろいろな葛藤が起きてきますよね。その葛藤は、最終的には「作家」側の意識が勝つんでしょうか。

福田■それはケースバイケースじゃないの？

永井■たとえば、尊敬する劇作家の作品を私が演出するのなら、この台詞はもっと大事にしてくださいとか、語尾を勝手に変えないでとか、作家の側に立つ意識はかえって強まるかもしれないですけど、自作を演出する場合は、誇りとコンプレックスが微妙に同居していて、役者が単純に台詞を間違えても、よくないと思って変えたんじゃないかと気を回してしまったりします。これしかないと思って書いたつもりでいても、他にも選択肢はあったかという迷いは、常に何パーセントかはある。役者さんには、いちばん触れられたくない、その不確定部分を必ず刺激されますね。自分に見えていたのとは違う地帯が広がっているんだって。それを稽古で目の当たりにすると、その違和感を作家的な主張で排除してしまうのは演出家としてするくないかという自制心も働きます。もちろん、書いたつもりもないのに、役者やスタッフの発見で

「演出はしよせん独裁よね」とかそういうようなこと。
僕、そういうの反対なんだよね。

【福田善之】



福田善之（ふくだ よしゆき）——劇作家。演出家。昭和6年生まれ。木下順二・岡倉士朗に学び、『長い墓標の列』で注目される。観世栄夫らと青年芸術劇場に参加。『遠くまで行くんだ』『オッペケペ』『袴垂れはどこだ』などを発表。平成6年『壁の中の妖精』で紀伊国屋演劇賞、7年『私の下町一母の写真』で読売文学賞。著書『真田風雲録』（ハヤカワ演劇文庫）ほか。桐朋学園短大・特別招聘教授。

素晴らしいシーンが実現するってこともよくあって、そういう場合には幸福な気分で作家的立場を忘れてしまいます。
——演出だけする演出家と違って、作・演出はジャンルが違うって感覚ですか。
永井■そうですね。かなり作品を読みこんだ演出家として稽古場に登場するわけです。その読み込みが、かえって良くない、一定方向にしか読めないという欠点になる場合もある。日本の演出家はビジュアル重視、解釈重視で才能を発揮している方は多いけれど、言葉役者がどう生きるのか、言葉と生身の役者の関連、物言いについて関心を持つ演出家はわりと少ないかなって。劇作家兼演出家が極めるべきは、ある部分そこだと思う。
福田■芝居を作るわけだからホン書かないと始まらない。やっぱり、自分がこうだと考えても、自己というのは「ここ」にあるんじゃないかって、人と人との間にある関係、それが「自分」だと。そういうことを、木村敏さんという僕と同年代の学者

さんが言ってる。だからやっぱり「複眼の強さ」ってものを僕は信じてるんですね。戦争終わった時、僕中学2年生で、民主主義の時代に育ってきてますからね。いまさら80になって変えられねえよっていうね。とくに演出の話をしてると「演出はしよせん独裁よね」とかそういうようなこと、どこの飲み屋でも聞きますよね、下北沢あたりにいけば（笑）。僕、そういうの反対なんだよね。

▼演出家はケンカしない

——作・演出の人ってスタッフと対立したりすることが多い印象があるんですけど、演出だけの人はわりと協調性ある感じなんですよね。
永井■私、演出やるって決まってる人って逃げられたから、しょうがなくて演出を始めたんですけど。最初は自信が無いものだから、かえってツツパって、よくケンカしてたんですけど、意地になって。でも、ケンカしてもあまり解決しない。やっぱり、問題を突き合わせて、相手にちゃんとやってもらった上で、私も言い、また考えるって循環のほうの実は物事が解決していくってことがわかった。だから、そういうケンカは、だんだんしなくなりました。思い出すと、いい役者と揉めましたね。ちよつとセンスがあつたり考えたりしてる人は、私と格闘するためにあえて突つかかってくるんですけど、そのことはちゃんと受け止めてあげないといけないんだって、だんだんとわかってきました。

福田■たとえば、その役者さんは「どうも思い通りにはいかない。今日の球は曲がらない、しっかり握っているのに思っ

対談：三流の芝居をつくろう。 福田善之 × 永井愛

たように落ちてくれない」とか。そういうイライラが、本人も思ってもいないような最低な言葉になったり。ちよつと運動部的な。そんなこともあつたんじゃないですか。

永井■昔は、一緒にやってる人は同年代だったから、率直な言い合いが揉め事に発展することもあつたけれど、最近はお互い一番年長ということもよくあって、皆さんが尊重してくれる。それがかえって、お行儀のいい緊張感になってしまい、率直な言い合いがでにくくもなってる。こちら、キャリアのある人にはやはり気を遣うし、若い売れっ子は別世界の人のような気がして、言葉の伝え方に迷うこともありまう。私は役者上がりの演出家でもあるので、自分にはできない演技を相手に要求しているんじゃないかという後ろめたさが常にある。でも、言いにくいことを、ちよつと悩んでから言うって、うまく言えなくても不思議に伝わる人が多いんです。それを避けて別の形で伝えようとしたらすると、うまくいなくて。だいたいどの公演の稽古でも、一番伝えたいところが相手のプライドを相当に傷つけるような気がして、必ず困りますね。そして何日か考えて（笑）、やっぱり言つたほうがいいと思つて言つたら、言いにくいことを言つたということ、逆に認めてくれて、考えてくれるようになったことがあつた。役者には、演出家が注文をつけていく関係ではあるけれど、向こうは向こうで演出家としての私をシビアに見ているわけで、演出家としての説得力は、劇作家とはまた別ですね。

▼三流になろうと思つた

——うかがっていると、福田さんは演出家の意識のほうが強いですね。
福田■あの、音楽好きだったんだけど。戦争終わった時にね、もう戦争行つて死ぬことないでしょ。僕の1年上からは全然意識が違ふんですよ。だって中学3年になるともう鉄砲持たされてるんだ。僕らは触つたこともないからね。まだ子供な

劇作をしなかったら、私は自分をとことん追いつめる ということをし、たぶんやらなかったでしょうから。

【永井愛】

んだ。で、戦争終わってこれからはなにをやったらいいだろうって言われて。音楽がいいんじゃないかなーって。で、指揮者になりたい。というのは、まず作曲を試みようと思つて冗談音楽の三木鶏郎さんの本を勉強していろいろ考えてみたわけ。それで、自分で気がついたの。よく考えると、俺の思いつくメロディってのはみんなすでに、ある（一同笑）。ダメだ。ただせめて、楽譜のppだのffだのをひっくり返したりとかさ、そういうようなのがさ。

——そういう演出家的な意識が……。

福田 ■まずはあった。あとはたまたま学校で、文化祭っていうのやるから演出やるやついなかった言われて、ついうっかりね、その瞬間にはつと閃いちゃった。演出って指揮者みたいなものじゃないかって。これは何人もライバルがいるんじゃないかなってばつと後ろ振り向いたら、僕一人しかいなかった。当然、僕になってしまった。結局それが今に至ってるよね。そのあとすぐイヤになったのよ。演出ってなんだ、貧乏クジだつて（笑）。

永井 ■若いころ、劇作家のイメージって、田中千禾夫さんや福田さんのようなインテリでした。だから、自分が劇作家になるなんて大それたことは考えられなかった。でも、ある時、チェーホフのものすごくつまらない芝居を見たんです。チェーホフは一心、一流とされていますよね。その一流作品をこんなにつまらなくしてしまうぐらいなら、最初から三流の戯曲を書いて、三流の上演をしたほうが、まだしても罪深くないんじゃないか。そう思ったとたん、あ、私が書いてもいいのかわつて。

福田 ■同じ事を考えたことある。



永井愛（ながいあい）
劇作家・演出家。二兎社主宰。桐朋学園大学短期大学部演劇専攻科卒。近作に、『こんばんは、父さん』『シングルマザーズ』『歌わせたい男たち』『書く女』『こんにちば、母さん』『寂家の三姉妹』『ら抜き殺意』など。紀伊國屋演劇賞個人賞・鶴屋南北戯曲賞・岸田國士戯曲賞・読売文学賞・朝日舞台芸術賞秋元松代賞などを受賞。

——（笑）。そこが一致したんですか。

永井 ■意外です（笑）。いい劇作家になろうって思わなかったから、とりあえず書き始めることができました。目標を高く持っていたら、きつと途中で投げ出していたと思う。忘れていた初心を思い出しました。

福田 ■「ぼく、じゅうばん！」っていつも思っている、目標を（笑）。見出しにしてくれるといいな（笑）。

◆芝居を作ることの歓び

福田 ■逆にさ。演出家が脚本を書くって、やっぱりそれをもう少し奨励したほうがいいんじゃないかって僕は思うけどね。作家で演出を兼ねるんじゃないかって、ひっくり返して、演出家て作家もやる人って。

永井 ■そういう方向に行った人は……

——あまりいいですね。やっぱり演出やっているとだんだ

対談：三流の芝居をつくろう。 福田善之 × 永井愛

ん役者の方に興味が行く気がします。作品を選んだ後は役者との創造作業になるから、演技に興味が出てくるというか。

永井 ■自分の作・演出作品に自分が出演するのって、私の場合はダメだなと思いました。どうしてもチェックが甘くなりますよ。他の人のことはいろいろ言ってるくせに、自分だけはノーチェックで演技して、結果としてそこだけ密度が薄くなるって。

福田 ■芝居の表現というものは賭けだと思ってるから、冒険だと思ってるから、そういう意味で言うとな役者は若いうちじゃないとちょっと……（笑）。

永井 ■自分が演劇つてもものに関わって、今までで一番がんばったこと、もう限界を超えて、本当に死んだ方が楽かなと思いつつもがんばったのって、劇作だけなんです。もともととは、役者がやりたくて演劇学校に入ったんですけどね（笑）。でも、劇団の試験には受からず、しょうがないから入ったあるグループも解散しちゃって、相棒だった大石静と私は、「自分で書かない限り誰も私たちを呼んでくれないね」ってことがやつとわかった。もう30近くなつて。だから、役者であり続けるために、初めて戯曲を書いたんです。その第一作を書き上げた朝、世の中の色がまるつきり違つて見えた。このような喜びがあるのかと、初めて知ったんです。いままで、楽しいこともいろいろあつたけど、それは劇作を仕上げたという喜びに比べたら大したことなかつたなつて（笑）。まだ誰も評価なんかしてないのよ。始まりと終わりのあるものを書き上げたことに対する、まったくひとりっきりの喜びなんです。劇作をしなかったら、こういう喜びを知ることにはなかつた。試行錯誤の果ての苦しみも、書けないかも知れないという恐怖も味わうことはなかつた。劇作をしなかったら、私は自分をとことん追いつめるということを、たぶんやらなかったでしょうから（笑）。

福田 ■すごいね。劇作に対する愛とかね。

永井 ■数々の名作を物した福田さんが、なにをおっしゃいますやら！

【了】



若手演出家コンクール2012 最優秀賞決定

2013年3月5日(火)〜10日(日)下北沢「劇」小劇場にて、若手演出家コンクール最優秀賞を決定する審査上演が行われた。第1次審査107名、第2次審査15名を経て、優秀賞に選ばれたのは4名。最終日の公開審査会にて、日澤雄介が最優秀賞に決定。全作品を観劇した観客の投票数で決まる観客賞は鈴木アツトが受賞した。



最優秀賞

ひさわ ゆうすけ
日澤雄介

「劇団チヨコレートケーキ」東京都

『親愛なる我が総統』

作：古川健(劇団チヨコレートケーキ)

Q: 演出を始めたきっかけは何ですか？

正直に言いますと、劇団チヨコレートケーキに所属していた座付きの作・演出がいたのですが、数年前にその彼が演劇をやめてしまい、その後紆余曲折を経て、劇団として活動していくにあたって演出を始めました。

必要に迫られた部分が大きくありました。

Q: 応募の動機は何ですか？

演出家として、現在の自分がどのような状態なのかを客観的に知りたく応募致しました。

Q: 今回の演出のポイント、気をつけたところはどこですか？

俳優の方々のその場で起こる感情の起伏をどのように伝えていくか？

また、俳優にいかにも新鮮に感情を動かしてもらったかを中心に演出いたしました。音響効果、照明効果もそれを前に押し出すように配置いたしました。

気をつけた事は、俳優に嘘をつかせないようにすることですかね。

Q: 演出専任の演出家として劇団外の作品も

やってみたいとは思いますが？

はい。様々な脚本家さんと色々な作品をやってみたいです。

Q: これまでの上演作品の傾向は社会派、という印象ですが他に

どういうテイストのものを演出してみたいなど希望はありますか？

劇団のカラーとして社会派と言われるものが多いのですが、僕としては、焦点はいつも人間に当てているのです。

ですので、どのようなテイストのものでも、人間が存在している作品なら演出してみたいです。

Q: 参加してみた感想をお願いします。

去年夏からこのコンクールに参加して3月の最終審査会まで、何とも慌ただしく、忙しい日々でした。しかし、その中で今までは感じられない緊張感であったり、様々な人との出会いを経験させていただきました。

そう言った意味で、とてもいい経験をさせていただいたと思っております。



優秀賞インタビュー

- ①応募の動機は何ですか？
- ②選出された理由を、自身ではどう考えていますか？
- ③今後どのような作品をつくってゆきたいですか？
- ④参加してみた感想

優秀賞

サリng ROCK 「突劇金魚」大阪府



『絶対の村上くん』
作＝サリng ROCK

- ①名誉があれば皆見直してくれるかと思ったので。ダメで元々残れば儲け、で。
- ②変なパワーと世界観：でしょうか？現実と虚構を行き来するかんじ？よくわかっていません。選ばれて光栄です。
- ③お客さんが世界に入りやすく、そして入ってからはぐるぐる迷わされるような



どこが出口かわからないような
そんな作品を…。
④普段聞けない感想や批評が聞
けて勉強になりました！
参加できてよかったです！
楽しかったです！
また東京で公演したいと思いま
す！よろしくお願いいたしま
す！

優秀賞・観客賞

鈴木アツト

【劇団印象「Indian elephant」】東京都



『青鬼』

作＝鈴木アツト

- ①若手演出家コンクール2010で、Mayの金哲義さんが最優秀賞を受賞されたのを見て、自分も金さんに続けたいと思ったので応募しました。金さんの作品は、愚直なまでに「伝えたいこと」が見えますよね。そこに憧れていますし、そういう「伝えたいこと」がある演出家が増えてほしいと思っています。

- ②海外での上演も考えて作品を作っているので、俳優の身体性や、視覚的なイメージを前面に押し出しています。その点が評価されたのではないのでしょうか。
- ③まず作・演出では、僕しか書けない戯曲を書いて、演出したい。食や医療、セックス、生と死、そういった人間の本質的なものを題材に優れた戯曲を書いていきたいですね。演出だけをやる機会も増えてきたので、そっちは、不条理劇に挑戦してみたいと思っています。特に今やってみたいのは、別役実です。



④観客賞を受賞したんですが、そのことを僕の周りの方々がすごく喜んでくれたことに驚きました。誰のための演劇なのか？観客のため？自分のため？俳優のため？審査員のため？それとも、劇場にはまだ来たことがない演劇を見たことのない人、でもきつと演劇を必要としている人のため？そういうことをもっともって考えて、演出していきたいと思っています。

優秀賞

中村房絵

【天辺塔】広島県



『箱』

脚本＝藤井友紀(黄金山アタック)、
武田信裕(ZZGODX)、新名基浩(天辺塔)、
永山智行(こぶく劇場)／廣畑明美、
四位エリカ(劇作家集団言葉サブリナボ)

- ①今まで、コンクールのような人から批評される経験がゼロでしたので、とにかくにも応募してみようかと。肌で感じることをいっぱい持って帰りたいです。
- ②正直よくわかりません。それは、ダメな部分の方が沢山思いつくんですが、でも、広島でコツコツと黙々と、考えて試して創ってきたことを評価された部分があるのであれば、それは劇団員共々とても嬉しく励みになります。
- ③自分が今立っている土地の時間と空気を感じながら、地面の下から伸びあがってくるようなモノづくりができればと。今回頂いたことを糧に、また、生活(生きていくこと)と表現との接点のオトシドコロを探し続けていきたいと思っています。一生。
- ④コンクールに参加したこと自体初めてだったので、すごく緊張して恐怖を感じていましたが、色々なものがクリアになったしとても貴重な体験となりました。自分の頭で考えていても答えが出せなかったことが、肌で感じた一瞬で出せるような。行動が何より大切なのだと実感できた機会でした。ありがとうございました。





若手演出家コンクール 公開審査

審査員は青井陽治・瓜生正美・岡田潔・加藤ちか（美術家）・木村繁・佐野バビ市・篠崎光正・土橋淳志・松本祐子・村井健・流山児祥の11名。各2票ずつの投票権を持つ。

今年の受賞者から「劇」小劇場での公演のほか韓国公演の機会が贈られることが発表された。

講評（全審査員の発言より抜粋）

▼SARING ROCK

松本 非常に面白く観た。言葉に対する愛情が込められた作品だと思う。言葉のおかげで人は自由にもなるし、狂人にもなる。どちらかというと、劇作家としてのSARING ROCKさんの特色と才能を強く感じた。音楽の使い方は好き。

篠崎 ニワトリの役がそもそもニワトリでなければいけなかった理由がよくわからない。ひとつひとつの流れを今までの演劇にないスタイルで演出しているのは新鮮に感じた。

村井 世界が浅いしだれ場がある。あと15分短くてもよかったのでは。無理に長くする必要はない。

岡田 非常にエネルギーで関西弁も気持ちいいんだけどなんだか同じところにいる。見る側をはじめの期待以上のところに誘ってくれない。

流山児 1シーン目でも自分と話してるんだとわかるから、作家のSARINGさんのことを演出家のSARINGさんがもっと相対化して、批評した方がいい

と思う。俳優の身体は温度を持っていて、それを見せるのが演出家なのではないか。でも、オレ、SARINGさんの劇世界というか、本は好きだな。何か、懐かしい、優しさがある。

▼鈴木アツト

青井 リアルで不条理でファンタジー。テイストは好みだが、冒頭、ファンタジーとしての起爆力が弱い。表面と裏腹な、根本の鋭さや重さがぐざりと見る者に刺さるには、自作自演出だけに油断がなかったか。同時期に他者の脚本を演出したものが、その点、力があつた。

木村 イルカのコスチュームの造形と椅子をいろいろなものに見立てるという美術意識がどうも一致しない。もっと別の方法で演劇的な興奮度を創り出すことはできなかったのか。

土橋 妻がなぜ夫を見捨てないのかがわからなかった。夫が最終的に水槽にいる結末もあるけどあるべき場所に収まっていく。そういう壁を乗り越えるのが演劇なのではないかと思う。

加藤 演出家として秀逸にできなかったならい手法を使っているが、今時それでもできない演出家が多い中、きちんとシンプルなものできりきっている。まず、そのレベルがあることを評価する。この作品をコンクールに向けてブラッシュアップした結果も評価できる。

佐野 コメディという目線で見ると笑いの取りこぼしがけっこうある。勿体なさを感じる。

村井 これは本当は笑ったあと怖くなる芝居。そうならないのは作・演出の技量の問題。

▼中村房絵

篠崎 イメージをコラージュするということに興

味を持った。ただ、イメージが別のイメージを生むように作らないと言葉が過剰になりどんどんあやふやになってしまふ。

青井 期待よりやわ。コラージュだとしても、つくったのは「ドラマ」なのか、「ストーリー」なのか。「劇」は虚空に放り出せるが、「物語」には決着がある。その甘さが「女の子」の限界か。今度はぜひ、嫌いな人と舞台をつくって欲しい。

岡田 無対象の演技が不正確になると途中でだれてしまつて見る緊張感が途切れてしまふのが残念。**瓜生** 志はいい。それがもっと演劇的に熟成してこちらに伝わればよかった。

加藤 閉じ込められるという事に対して、反発する力が見えなければそれが伝わりにくい。身体性やコンセプトを強く打ち出す客観性をもつと持つと作品がより良くなる事を二次審査の時に伝えたが、結果が出なく惜しまれる。

土橋 中村さんの方法は確立されている。役者を一人増やしても変わらないのではないかとというくらい均一化されていて、それはいいことでもあると思うが違和感をおぼえる。

▼日澤雄介

松本 すごく丁寧につくられている。淡々と繊細な演技で劇世界を積み上げている。ただ、作品としての切り口に特に新しいものを感じなかった。また、後半の人の価値観が変化して行く過程の積み上げ方は、役者の力量の問題もあるかもしれないが、もう少し変化が見えたいところ。

村井 限られた時間、限られた空間であれだけの水準のものが見せられるというのは凄いな。このコンクールにとっても刺激的な作品だったと思う。

青井 どんなにオーソドックスに見えても、演劇であるからには冒険であり、実験でありたい。今、いちばん評価されにくいタイプの実験をするその勇氣。演劇的な努力や実力。すべて群を抜いている。コンセプトから結果まで、首尾一貫した知的な力業。素直に認め、賞賛すべき。

佐野 観た人が次に日澤演出作品ではなくこの劇作家の作品を観たくなってしまう気がする。戯曲に書いてある100のことを100そのまま伝えられていと思うが、120や130にしてゆくのが演出家なのではないか。

瓜生 第二次世界大戦についてはドイツの方が日本よりはるかに反省している。今この作品を日本で行うことに意味があると思う。

	青井陽治	鈴木	中村	日澤
青井陽治	★			★
瓜生正美		★		★
岡田潔				★
加藤ちか		★		★
木村繁	★			★
佐野バビ市	★	★		
篠崎光正		★		★
土橋淳志	★			★
松本祐子	★	★		
村井健		★		★
流山児祥	★			★

鈴木7票、日澤9票で上位2名となり最終投票へ。鈴木3票、日澤8票で日澤雄介が最優秀賞に決定。4作品全作観劇した観客によって行なわれる観客賞は、総投票数56票中鈴木アツト16票、SARING ROCK15票、中村房絵10票、日澤雄介15票で鈴木アツトが受賞した。

2012 演劇CAMP in 中津川

■イベント「国際演劇祭に向けて」

総合司会：外波山文明／鹿目由紀

◎市民のための朗読講座『夜明け前』

講師：外波山文明 10月18日・19日 馬籠集会所

◎講演『国際演劇祭は町をかえる』

講師：園山土筆 10月20日 常盤神社社務所

◎国際シンポジウム『東アジアの演劇交流』

パネラー：朴章烈氏（韓国）宋炯鐘氏（韓国）、石山雄太氏

コーディネーター：流山児祥 10月20日 常盤座



■常盤座シアター 10月20日 常盤座

◎市民サポーター育成講座発表会・音楽朗読劇『鹿踊りのはじまり』

◎劇団tamago PURiN『おかわりおやさい』

◎演劇企画集団・楽天団プロデュース公演『ウィンドミル・ベイビー』

◎糸あやつり人形劇団みのむし『怪談・幽女執念』

■分科会「宿場で快談!! 語ろうぜ、演劇の今」

10月18日～19日 馬籠ふるさと学校

◎「全国の演出家大集合!『演出家の今』」 座長：流山児祥

◎「企画書を書く!」 座長：加藤智宏 ゲスト：岡井直道

◎「フォーク・ジャンボリーが残したもの」

座長：佐藤久 ゲスト：安保洋勝、山内總太郎

◎「伝統演劇と現代演劇」

座長：市川尚樹 ゲスト：村井健、中村津多七、ふじたあさや

◎「全国の演出家ネットワークづくり」 座長：渡部ギユウ

◎「子どもたちと演劇」 座長：川村ミチル ゲスト：ふじたあさや

◎「国際演劇祭は何をめざすか」 座長：桐山知也 ゲスト：七字英輔

◎「宿場で快談!! 全員集合」 座長：木村繁

■中津川の“魅力”を知ろうツアー 10月19日

◎「酒蔵見学&味見してみよう!」三千櫻酒造株式会社

◎「栗きんとんの蒸したてのほかほかを味見してみよう!」道の駅「きりら坂下」

■第23回 蛭川歌舞伎公演・観劇

10月21日 芝居小屋「蛭子座」

2012年10月18日(木)
～21日(日)

会場：馬籠ふるさと学校／
馬籠集会所／
常盤座／蛭子座



8

2012演劇CAMP in 中津川レポート

実行委員長／木村繁

日本演出者協会と中津川市が開催してきた演劇CAMP in 中津川は4回目を迎えた。今回は北海道から九州まで協会員に集まってもらい分科会を開催した。テーマは「全国の演出家大集合」「子どもたちと演劇」「国際演劇祭は何をめざすか」「伝統演劇と現代演劇」「企画書を書く!」など多岐にわたり、中津川市民も多数参加した。とりわけ「中津川フォーク・ジャンボリーが残したもの」のインパクトは大きかった。運動には意見の違いが必ずあるもので、複眼的な眼をもつこと。文化の専門化も大事だが、生活に密着した芸術を花咲かせる必要性が報告された。詳細は佐藤久（陶芸家）座長に寄稿してもらった。また、八雲国際演劇祭の芸術監督園山土筆氏の講演会「国際演劇祭は町をかえる」は地域演劇祭の具体的な事例が報告され関心が高かった。

市民サポーター講座、ほりみか指導による「鹿踊りのはじまり」は、公募市民の皆さんが上演だけでなく、演劇論やプロデュース論、地歌舞伎の歴史なども含めて学んだ。中仙道の宿場で開催した外波山文明指導の「夜明け前」の朗読には、文学や朗読の愛好家に参加してくれた。また、常盤座シアターでは楽天団プロデュース「ウィンドミル・ベイビー」、劇団tamago PURiN「おかわりおやさい」、糸あやつり人形劇団みのむし「怪談・幽女執念」が上演された。

国際事業は東アジアの演劇交流についてシンポジウムを開催した。パネラーは朴章烈氏（韓国）、



宋炯鐘氏（韓国）、中国で活躍する石山雄太氏、コーディネーターは流山児祥氏、今年韓国公演をしたオイスターズの平塚直隆氏も参加した。中国代表の袁鴻氏は尖閣列島事件の影響でビザがおりず参加を断念した。まず、韓国の大学路小劇場街では南北2kmに147が立ち並ぶ劇場があり、その経営は、個人20%、公立20%、商業資本60%であるというデータが紹介された。又、近年の事業では「100円劇フェスティバル」「100人のモノストリーフェスティバル」などが報告された。また韓国社会の中で演劇の存在が弱くなっていると警告を発する。そのため国際バザーを開催したいと提案、日本でも2013年日韓交流バザーを芸能花伝舎（東京）で開催することになった。石山氏からは中津川の地歌舞伎と中国の京劇の共同事業をしたいとの発言もあった。

栗きんとん作りツアー、酒蔵見学ツアーなどの交流事業も好評だった。

演劇キャンプ

in 中津川に参加して

分科会「フォークジャンボリーが残したもの」
座長／佐藤久

三年間実行委員会に名を連ねてはいたが、ほとんど観客として参加した。

昨年は、分科会で座長をということで、「フォーク・ジャンボリーが残したもの」というテーマで、1969年から三年間岐阜県恵那郡坂下町（現中津川市）椈の湖畔で行われた「全日本フォーク・ジャンボリー」をテーマに当時のスタッフお二人に質問をしていくという形で行った。

69年当時私は高校生。最初は観客として、二回目からはスタッフとして準備から参加。ただ、ずっと疑問に思っていたのは「なぜこんな小さな町で歴史に刻まれるようなことができたのか。」ということだった。

お金がないのでできることはすべて自分たちでやった。これはたぶん特別なことではなく、当時の日本では当然のことだった。当地でも、高校や中学校も自分たちの手で基礎の石運びをしたり、寄付を集めたり、自力で必要なものを調達したり、作り出したりしていた。

外からの風が入ったこと。高石友也、岡林信康というふたりの力が大きかった。伊那の田楽座もわかりである。また、スタッフの中には「文化は東京からやってくる。」ということに疑問を持っていた人たちがいたこと。自分たちが楽しみたいと強く思っていたこと。だから、71年にはジャンボリーの開催前の6月に「アンチ・フォーク・ジャンボリー」を開いてもいい。



「若い衆のやることだ、なにかわけのわからんことでも応援するか。」という大人の存在。特に、時の町長、教育長の協力はとても大きな力だった。また、町の

の人たちもたくさん力を貸してくれた。たくさん叱られもしたが。全国から数十人の若者が坂下に来てきて、毎日曜日の作業を手伝った。アルバイトしながら。

ジャンボリーの3年が終わった時には、フィード・フォーク・ムーブメントが始まっていた。身体を動かし、頭を使い、自分で考えることを基本に。唄をつくりたい、楽器をつくり、山へ登り、山の頂上でコンサートを開き、川をくだり、三壘へはしってもいい野球をやったり、八時間耐久バレーボール大会だったり、LPレコードをだしたり、地歌舞伎やったり、お芝居つくったり、マラソンしたりと遊ぶことを精一杯やった。77年には雑市楽座というもののづくりの工房も始めた。

実行委員長だった笠木透は各地の人たちと数千曲の唄を生み出し、スタッフの中心安保弘勝、山内総太郎は農業小学校を続けている。当時かわった人たちの多くが自分ができること、楽しくいけること、遊ぶことを続けている。

若手演出家コンクール2011（前年度）最優秀者公演
受賞者 平塚直隆さんインタビュー

Q1 コンクール最優秀賞を受賞されて何か変化はありましたか？

それがですね、特に変化は無いのです。仕事の依頼が増えた、という事もないです。仕事下さい。あ、気持的には「僕は演出家である」という自覚は持てるようになりました。

Q2 韓国公演はいかがでしたか？

とても良い勉強になりました。刺激も受けました。世界は広いなあと思いました。韓国の人は皆優しくかったです。演劇に関わる人だけでなくサムギョプサルのお店のお母さんとかカフェの店員さんとか。

Q3 記念公演はどのような印象でしたか？

もっとたくさんの演出者協会の人に来てくれた。とてもいいのになあーって思いました。無料なのに。

Q4 演出だけをする、ということについてはどのようにお考えですか？

劇作は無いところから生み出す、という感じで、演出は在るものを掘り出す、という感じ。掘り出して磨いて展示するのが演出なので何かを作らだしいけないなと思ったりしてます。

Q5 今後演出家としてやってみたいことはどんなことですか？

おおざっぱに言う「町おこし」ですね。

オイスターズ
『ドレミの歌』

作・演出／平塚直隆
2013年3月15日（金）～17日（日）
下北沢「劇」小劇場



撮影：五十嵐祐太

演劇大学 in 福岡

(報告) 瓜生正美 演劇大学 in 福岡実行委員会・校長

2012年8月31日～9月2日
会場 グローバルアリーナ (宗像市吉留)
講師 西沢栄治 羊屋白玉 和田喜夫 智春
小堀泰史 中村雪絵
担当 山田恵理香
企画制作 日本演出者協会福岡ブロック
アートマネージメントセンター福岡
主催 文化庁 日本演出者協会
共催 (公財) 福岡市文化芸術振興財団
協力 グローバルアリーナ

8月31日(金) から9月2日(日) までの三日間、今回は趣向をかけてキャンプ地での開校ということ、それなりの準備もして参加した。「蚊取り線香」から「虫刺され予防」など万全の体制で臨んだ「大学」であった。福岡の市街地を抜けて吾々を乗せたバスは走っていく。一時間ほどで到着したのは、「テント張りのキャンプ地」という私の予想とは大違いの、手入れの行き届いた美しい芝生と木立ちに囲まれたグローバルアリーナという名の「ペンション大集落」であった。

大きな本部、集会室、大・中・小の板張りの稽古場、そしてホテル並みの設備の行きとどいた宿泊施設という思いもかけない別天地の「大学」であった。

「大学」の課業のプログラムは、西沢栄治、羊屋白玉に地方演出家小堀泰史、中村雪絵が参加しての(1)「地元演出家×講師とつくる『劇団体験』」(2)和田喜夫の「アボリジニ演劇をつくる」(3)智春の「からだのワークシヨップ」の三コースで、校長としての私の仕事は、その三コースを巡回し、時には生徒で参加する。そして最終日の上演発表の前後に少し挨拶をし、

感想を述べるという恵まれた楽しい仕事であった。とにかく膨大な面積を持つアリーナなので、会場の地図を手に稽古場を探して相当な距離を歩くのは一仕事であった。毎日、そして時には午前と午後に会場が変わることもあるので毎日3〜4キロは歩いたと思う。楽しい、時間があれば喫茶店でコーヒー味わいつつの散歩でもあった。そして、参加者の熱気と先生達の適切な指導で僅かの時間とは思えない急成長の三日間であった。

うれしい事に、地元の各方面のご協力もあって「あと二年、同じ場所で開催」ということになって終わった。大成功の楽しい「演劇大学 in 福岡」であった。又、お会いしましょう！



演出家・俳優養成セミナー2012 報告

演劇大学 in 大阪

(報告) 木嶋茂雄 演劇大学 in 大阪実行委員会

2012年9月3日～12月3日
会場 梅田カルチャー
講師 棚瀬美幸 山口茜 サリン9ROCK
わかぎあふ 片岡百萬両 山浦徹
石原正一 上田一軒 山崎彬
ごまのはえ 林慎一郎 ウォーリー木下
担当 木嶋茂雄
企画制作 日本演出者協会関西ブロック
主催 文化庁 日本演出者協会

マスコミの東京一極集中の弊害で、関西にはまだまだ全国的に知られていない有能な演出家が多い。「演劇大学 in 大阪」は9月から12月にかけて毎週月曜日、関西に活動基盤を置く演出家12人を選出、「演出の極意を聴く」というコ

口茜「妄想は両目をふさぐ手を二本持っている」、9月24日サリン9ROCK『しまうまの毛』を解説します、10月1日わかぎあふ「7人の主役」創作の窓」

ンセプトで開講した。全体を3期に分け、各期異なった切り口で演出家をグルーピング、各演出家には、自分の演劇とのかかわり始めから演出手法や稽古方法、こだわり、スタッフの選択基準、観客との関係など、舞台化させる際の多岐にわたる構成要素に関して自身の作品の映像を紹介しながら自由にお話しいただいた。東京圏での演劇関係者のセミナーやシンポジウム等では決して披露することのないような「がっこ悪い話」や試行錯誤や失敗、ある種のあいまいさ、いい加減さも含めて、現在を生きる演出家それぞれの個性と現場での格闘ぶりや思考や志向が伺え、演劇芸術に継続的かつ真摯に取り組む姿勢が伝わり、受講者にとっては演劇の魅力

●第2期『エンターテイメントの旗手たち』10月15日片岡百萬両「おもちゃばこをひっくりかえそう」、10月22日山浦徹「思いついたら全部やれ」、10月29日石原正一「ライバルをつくれそして勝て」やってみたらいいですよ、11月5日上田一軒「俳優志望だからこそ」

を再発見するに十分な講座内容になった。以下、全講座を紹介。

●第3期『進化する表現・気鋭の演出家たち』11月12日山崎彬「自分でもわからないくらいがちょうどいい」、11月19日ごまのはえ「ごまのはえ箴言集・煮えるヤング」、11月26日林慎一郎「俳優を決めて、8割終了」、12月3日ウォーリー木下「半分ウソで半分ホントの演出家の仕事」

●第1期『関西の女性演出家特集』9月3日棚瀬美幸「なんで演出んですか」、9月10日山





演出家・俳優養成セミナー2012報告

演劇大学in盛岡

(報告) 坂田裕一 演劇大学in盛岡実行委員会

盛岡での演劇大学は3年目を迎えた。昨年度は震災の影響もあり、平成24年3月に実施し、今回は9月実施なので、わずか半年の間を置いてただけだったが参加者は前回を上回った。

今、岩手では震災を題材とした公演を行うべきかどうか、という議論がある。震災をテーマにした公演は生々しすぎるという意見と、震災を風化させないためにも震災を取り扱うべきだという意見だ。どちらにも理があるが、それが行き過ぎることへの危惧も感じる。今回の演劇大学ではそれを取り上げての議論はできなかったが、二つの座学で、今後の議論の下拵えができたのではないかと考えている。

「座学・日本演劇史」(講師・村井健氏)と「座学・アングラから現代演劇」(講師・流山児祥氏)だ。お二人の講義から日本の演劇が社会とどう向き合い、日本の演劇を作り出してきたかを知ることができた。震災後への演劇のアプローチは、日本の演劇史と無縁で語られてはならない。また、村井氏の座学から新しい取り組みが生まれた。「スタニスラフスキーの俳優の仕事」を丸ごと読もうという取り組みだ。11月から約10名という少ない人数だが、俳優の仕事の全文を声

2012年9月28日(土)30日

会場 いわてアートサポートセンター プラザおでつて

講師 斎藤晴彦・西沢栄治・村井健・小林七緒・

流山児祥・和田喜夫

担当 坂田裕一

企画制作 演劇大学inもりおか実行委員会

主催 日本演出者協会

文化庁 日本演出者協会

共催 岩手県演劇協会・盛岡演劇協会

に出して読もうという自主講座である。五回シリーズの第一期を終えたが、継続の声が強い。また、2回連続となる海外戯曲のリーディング(講師・和田喜夫氏)は根強いファンの参加で好評だった。3年連続の小林七緒氏の実技講座は熱気あふれる講座となった。実技講座を含め、講座修了者から新しい岩手の演劇のリーダーの萌芽もあった。

修了者の1人は劇団を立ち上げ、数名が岩手の演劇活動をけん引する精力的な活動を展開している。

しかし、岩手の演劇の振興にはもう一つの刺激が欲しい。演出と演技レベルの向上を図るためのレジデンスの試みだ。演劇大学を一步進めて、第一線で活躍している演出家と数名の俳優を招いて岩手の演劇人と一緒に芝居を作るプログラムの実現を目指したい。



演出家・俳優養成セミナー2012 報告

演出家・俳優養成セミナー2012報告

演劇大学inしものせき

(報告) 加藤孝明 演劇大学in下関実行委員会

下関での演劇大学は今回が3年目の開催です。今年は、2012年12/8(土)、9(日)、14(金)、15(土)、16(日)の5日間、下関市民会館で開催され、市内外から俳優や演出家を目指す人、演劇鑑賞を楽しみたい人など109名が参加、講座のべ参加数は203名でした。

今年は、鴻上尚史さんの直接指導と高都幸男さんによる野田秀樹作品の体験、朗読は和田喜夫さんの体も使って表現する朗読劇と、みんなで読むことを体験するものとの2種類、篠崎光正さんによる演出の基礎講座、智春さんによる表現者の基本、身体を感じるワークショップなど幅広い講座となりました。

今年の演劇大学は、各講座参加者による発表が最終日に行われるメニューとなったため、参加型講座が中心で、講師陣も最終日の発表に向けて講座を早く開始したり延長したり、また、発表用ステージでリハーサル時間の奪い合いになるなど、今まで以上に白熱しました。

12/8は日本演出者協会理事長の和田喜夫さんの挨拶で始まり、和田講師による「アポリジニ朗読劇」、高都講師による「野田戯曲で遊ぼう!」、山口恭子講師(紅生堂所屬) 渡裕子講師

2012年12月8、9、14日(土)16日

会場 下関市民会館

講師 鴻上尚史 篠崎光正

高都幸男 智春、和田喜夫 武部忠夫

担当 あかまつみか 金森健一

企画制作 演劇大学inしものせき実行委員会

日本演出者協会

主催 文化庁 日本演出者協会

共催 (公財) 下関市文化振興財団

後援 下関市 下関教育委員会

(劇団海峡座女優) による「朗読」が行われた後、交流会に移りました。

「アポリジニ朗読劇」、「野田戯曲で遊ぼう!」は12/9と15と16、鴻上講師による「表現のためのワークショップ」が12/14、智春講師による「感じる身体と表現」、篠崎講師による「演出のABC」が12/15、12/16の午前は「アポリジニ朗読劇」、「野田戯曲で遊ぼう!」、「感じる身体と表現」、そして午後、それら3講座が演劇大学で作り上げた発表作品として、下関市民会館大ホールの舞台上(ステージ・オン・ステージ)で発表され、大変な盛り上がりでした。最後に、シンポジウムでは、場所にとらわれずに行動を起こそうといった意見が出されました。

演劇大学の各会場は、講師の指導と参加者の稽古で、真冬の寒さを吹き飛ばすほどの熱気にあふれていました。講座を終えた参加者から「次回、下関での演劇大学の開催日程はいつですか」、「また来年も下関で演劇大学を開催して欲しい」という声を頂きました。



演劇大学 in 札幌

(報告)イトウワカナ 演劇大学 in 札幌実行委員会

演劇大学 in 札幌は、2003年より演劇大学札幌実行委員会が中心となり、自分たちの街で演劇をするということを真ん中に据え、企画段階から行っているのが特徴です。実行委員会には、蘭越町で演劇活動を行っているメンバーがあり、そのため札幌と蘭越、ふたつの街での同時開催となりました。in札幌、と言いつつ、こ

んなの良いのかしら?と不安はありましたが、長らくわたしたちの作業にお付き合いたいだいてる青井陽治さんと羊屋白玉さん、また協会の皆さんの協力でこのような企画を実行させていただきました。ありがとうございました。

5人の演出家に5人の講師がつき、俳優たちはそれぞれ希望したクラスで数日間のクリエイションを行います。今回は「出現」というテーマを掲げ、それをヒントに、または、それに到達するために、それぞれのクラスが演出家と、講師と、俳優と、ともに考え試行錯誤してゆく時間でした。

札幌の場合、こういったセミナーは若い俳優はあまり参加したがないのが現状です。しかし今回は、若い俳優たちの参加が多く、蘭越ではお母さんと娘さんの親子での参加や遠く九州からの参加があり、さまざまな「俳優」の参加があったことが嬉しいことでした。このこ

2013年1月16日〜20日

会場 ターミナルプラザことP.A.T.O.S

あけぼのアート&コミュニティセンター

蘭越町民センターらぶちゃんホール

講師 青井陽治 羊屋白玉 坂手洋二

担当 広田淳一 タニノクロウ

企画制作 イトウワカナ

主催 演劇大学 in 札幌2012実行委員会

主催 日本演出者協会

文化庁 日本演出者協会

共催 NPO法人コンカリーニョ

とは地域で演劇を行うということを示しているでしょう。だいたいの場合が、演劇以外の仕事をしながら演劇を続けています。演劇大学の期間が否が応でも演劇のことばかり考える日々ですから、新鮮な日々であることは否めませんが、このような時間が地域の演劇に携わるひとたちに必要であるし、演劇の世界で働いている方々と出会うということもわたしたちにとって、非常に必要なことと思います。

演劇大学は、その数日の中で完結していくことはまた別に、もっと長い目で見たこの先の時間の、何かしらのきっかけとなるようなものであるとも思います。わたしたちは試行錯誤の時間を新鮮とせずに演劇と向かい合いたいし、時いてもらった種をどうしてゆ

か考えなければなりません。ほんとうの演劇大学は、日々のクリエイションなのだといつも感じます。



演出家・俳優養成セミナー2012 報告

演劇大学 in あきた

(報告)富橋信孝 演劇大学 in あきた実行委員会

湯田町の演劇専用劇場「銀河ホール」で、15年間演劇プロデューサーを務めた新田満さんに誘われて、日本演出者協会の会員になったのが2011年。それから1年も経たず「演劇大学を秋田でやれないだろうか」という誘いが、やはり新田さんから持ちかけられた。この頃、秋田県国民文化祭基本構想検討委員を務めていたので、国民文化祭が秋田県で開催される2014年に「演劇フェスティバル」と一緒に「演劇大学」を秋田でやれば良いな、くらいに思っていた。ところが新田さんからは「盛岡で3年間やるので、秋田でも3年続けてやりましょう。」と、説き伏せられてしまった。

2012年9月から講義内容・講師の選定などを始めたが、なにもかもが初めての事だったので、日本演出者協会事務局の齊藤由夏さんにおんぶに抱っこだった。開講した講座は、

- 「実技Ⅰ 表現ワークショップ 講師：鴻上尚史」
- 「実技Ⅱ 3日間作品を創ろう(一般・学生) 講師：小林七緒」
- 「実技Ⅲ 3日間作品を創ろう(高校生以下) 講師：西沢栄治」
- 「座学Ⅰ 演劇の歴史 講師：村井健」
- 「座学Ⅱ 俳優と演出の仕事 講師：和田喜夫」

2013年2月1日〜3日

会場 秋田市にぎわい交流館

講師 鴻上尚史・小林七緒・西沢栄治

村井健・和田喜夫

担当 高橋純・加藤正志・富橋信孝

企画制作 演劇大学 in あきた実行委員会

主催 日本演出者協会

文化庁 日本演出者協会

共催 秋田県演劇団体連盟

実技Ⅰが定員オーバーとなり調整が大変だったが、延べ103名の方が参加してくれた。今回の演劇大学は、秋田県演劇団体連盟の「第39回秋田県演劇セミナー」も兼ねていたので、県内の加盟劇団も参加し、2日夜は講師も含め50名以上の懇親会となった。

秋田県で2回目の演劇大学は、くらの街・横手市増田町で2013年12月12日〜14日に開催される事が決定。さらに、『第29回国民文化祭・あきた2014』での現代演劇のフェスティバルが、小坂町と当連盟が実行委員会を結成して、あの歴史的な芝居小屋「康楽館」でやる事も決定した。『演劇フェスティバル』の日程が2014年11月1、2日に決ったのを受けて、小坂町では『演劇大学 in 小坂』を1週間前の10月24〜26日に開催したいとの意向だ。

これで本当に、3年続けての開催が決まりそうだ。すでに、横手市での講義内容・講師の選定が始まっている。



日本の近代戯曲研修セミナー

in 東京

菊谷榮作『最後の伝令』 演出 智春
菊田一夫作『花咲く港』 演出 青井陽治

▼9月15日・16日 芸能花伝舎



今回は通常の新劇史からは除外されている大衆演劇的な喜劇に注目し、共に昭和初期の浅草で、いわゆる軽演劇のレベルを高めた二人の劇作家を取り上げた。『最後の伝令』は、浅草時代のエノケン喜劇の骨格を支え続け、若くして日中戦争で戦死した菊谷榮の代表作で、かつアチャカ喜劇史上の代表作でもある。これは舞台裏の暴露による、一種の演劇形式の破壊という現代性を含み、井上ひさしなども大いに示唆を得たと書き残している。そして台詞より行為による笑いが軸となるので、智春演出は大道芸的身体性を取り込み、リーディングとしては極北(?)を行く、台本を持つの大アクション篇となった。『花咲く港』は、浅草から丸の内へ、そして戦後、ラジオ・ドラマで旋風を巻き起こし、後に東宝演劇の頂点に立つ菊田一夫の中期の傑作である。(昭和十八年・帝劇初演)戦争の始まる時代とその当時の日本人の庶民感情を綿密に描き込んだ膨大な台詞を、青井演出は心理的な説明性を排除して、音声の明晰とそのエネルギーを前面に打出す方法論で一気に乗り切った。こちらはリーディングに於ける台詞の力を信じて正面から挑んだオースドックスな研修の手応えがあった。

そしてシンポジウムは、『最後の伝令』は、ある時期榎本健一に師事された、元国立劇場の平島高文氏、『花咲く港』は、最近『菊田一夫の仕事』という著書を出された井上理恵さんを招いて、それぞれの演出家とアドバイザー中村で話合った。昭和初期浅草のアナキー

in 関西

写実を超えた、奇想・幻想作品の2作者をリーディング

岸田國士作『麵麴屋文六の思案』
『遂にへ知らん』文六 演出 菊川徳之助
泉鏡花作『山吹』 演出 ジャニス・A・リン

▼12月22日・23日 谷町劇場

関西ブロックの「日本の近代戯曲研修セミナー」は、会員に公募。菊川徳之助とジャニス・A・リンの二人のみの応募であったので、この二人に決定し、12月22・23日に谷町劇場を借りて発表することにした。稽古途中には、講師のレクチャーを受けたり、当日には、シンポジウムにゲストパネラーをお願いした。

岸田國士と泉鏡花作品の二夜となった。簡単な舞台装置に、台本を演技者が手に持った朗読。岸田作品はト書きも読む。両作品とも、動きを少し付けた演出。岸田の日常語に、鏡花の古文調。岸田の、現実を扱いながら奇相的な展開と、鏡花の、魔界と現実が交錯するよう、な色のある世界を織りなした舞台。当日のパネラーの豊かで興味そそられるシンポジウムが観客も魅了した。参加者の声にも「極めて対照的な二人を一挙並べた巧みな企画。観客もよく集まった。舞台としても充分に成り立っていた。講師 パネラーからも唯の論ではない具体的な示唆があった」というご意見は貴重であった。(シンポジ

ウムは、岸田が、井上理恵、湯浅雅子に演出者。鏡花は、正木喜勝、キタモトマサヤに演出者。

岸田の『麵麴屋文六の思案』『遂にへ知らん』文六の2本は、上演の多い岸田作品の中では、あまり上演されないもの。『麵麴屋』は6劇団のみ、『知らん』は、劇団では上演されていない作品。彗星が地球に衝突して人類が滅亡するという奇想天外の2本の続きもの。今回は3・11の影響で上演を決意したが、なんと発表(舞台)が、マヤ暦の人類滅亡の翌日。研修作品は、現実味をおびて興味をおぼえられたようである。

鏡花の『山吹』は、美麗な文体を明確に表現すること、ポイントを絞り、道具などは抽象化、どれだけシンプルにできるか。人形師の強い求めにより夫人の責折檻と人形師の過去の罪と夫人の心の闇。現実と魔界が不気味に浮かび上がり、美しい舞台がグロテスクに変わる稽古に苦心。手も足も出ない作品に、手も足も出してみた研修であった。

(菊川徳之助)



in 東海

岸田國士を読む

『留守』 演出 岡田一彦
『紙風船』 演出 右来左往
『命を弄ぶ男ふたり』 演出 石狩真佐夫
『葉桜』 演出 本島勲
『秘密の代償』 演出 丸知亜矢
『感化院の太鼓』 演出 菊本健郎

▼2013年2月23日・24日
名古屋市演劇練習館(アクテノン)
大リハール室

今回の近代戯曲研修セミナーは、これまでと趣を変え

て一般の演劇人からも受講者を募集して行いました。共催をお願いした、名古屋市演劇練習館(アクテノン)で日ごろ演劇活動をされている方々に呼びかけ、出演者として全10回の研修に参加していただき、2月23日・24日の発表に至ったのです。プロの俳優さんから、アマチュアの主婦の方まで、20代から70代の幅広い顔ぶれが集まりました。6作品それぞれのグループに別れ、私達6名の演出担当協会と共に、岸田國士という作家について学習し、作品を研究し、リーディングの稽古をして、発表に臨んだのです。中には発表間近に体調を崩され入院されたのですが、病院を抜け出してステージに立つという、涙ぐましい努力をされた方もいらっしゃいました。発表の舞台は演劇練習館5階にある間口6間奥行き5間のリハール室。幕類や照明、音響設備も整った堂々たるリハール室です。限定40名の客席は連日その数を越えて、立ち見も含め、延べ200名の観客で溢れました。

この試みを通してのひとつの成果は、ともすれば私達演出者のためだけにありがちな研修から、地域の演劇人との交流という形により、この地域の演劇全体にとって幅広い可能性を示した研修になった点にあると考えます。また、発表後のシンポジウムでは、東京からお招きした協会員、中村孝夫氏の、分り易く興味深い基調講演を中心に、岸田國士という作家、作品について、あるいはドラマリーディングという表現スタイルについて、一般の観客も交えた熱心な討議が行われました。

反省点としては、3ヶ月の間、週1回3時間を基本とした研修時間が果たして妥当であったかどうか、もう少し時間をかければ更なる成果があったのではないかと、いう点。また、私達演出者協会員の中でドラマリーディングという発表スタイルについて、今ひとつ合意がなされていない点ではないか、という点にあります。これらは今後の課題として更に検討を重ねていく必要があるかと考えます。

(菊本健郎)





各地域活動通信

北海道

大きなものを2つ報告します。11月には札幌劇場祭「Tease Go Round」(TGR)がありました。市内9つの劇場が参加し、演劇、音楽、オペラ、人形劇など様々なジャンルの作品を1ヶ月間にわたり上演する企画です。毎年変わる審査員が選出する「TGR札幌劇場大賞」が用意されていて、全28作品の中から今回は弘前劇場が『素顔』で受賞しました。

2月には演劇シーズン2013冬がありました。札幌でうまれた作品を再演するというもので、高い評価を受けたものが選出されるため、はじめて観劇をする人にも劇場に足を運んでもらいやすい内容になっています。1ヶ月間にわたり「シアターZOO」「コンカリーニョ」2つの劇場で連続上演されるのも特色です。今シーズンは5作品4劇団が参加しましたが、それぞれの劇団が1週間以上の上演を行います。観客は平日の仕事帰りに、気が向いたらふらりと劇場に立ち寄ることができ、また劇団側は再演作品とじっくり向き合うことができます。

演劇シーズンは夏と冬に開催されることになっていて、これらが札幌では大きな演劇の企画と言えます。これらの作品が地域に根付き、より他ジャンルの作品を発信していけるようになることを願います。

【清水友陽】

群馬

「鶴舞う形」とかたに評される群馬県。大小40余りの劇団がひしめき、老いも若きも演劇に親しんでいます。鶴の心臓部、由緒ある前橋演劇祭は近年縮小気味ですが、前橋の商店街にあるキャバ130ほどの小劇場では若手劇団の公演が相次ぎ、後付で「まるで演劇祭」と銘打つことに。赤城の山の麓では群馬中芸が創立50周年を迎えてまだまだ元氣。

高校演劇界では大河でも取り上げられる(予定の)新島学園高校「厄介な紙切れーバルカン・シンドローム」が関東大会で優秀賞を受賞し、いわきアリオスにて行われた春フェス2013に北関東代表として参加しました。こちらは鶴の胸になります。

鶴の首の方に進みまして、桐生市では明治時代の倉庫群を使って隔年で行われる「有郷館演劇祭」は9回目を数え、実行委員会が1年前から準備を進めています。同じく頸部の境町では文化センターにて毎年夏に開催される演劇フェスティバルが16回目！高校の演劇部から創立20周年の老舗劇団まで、多くの演劇人たちの発表の場になっています。

演劇祭と自主公演それぞれで動員をあげていくこと、他分野との積極的な交流などまだまだ課題も多く、若手劇団主宰の奮起のしどころです。

【平戸麻衣】

千葉

千葉県出身だが、千葉県の演劇事情と言われてもピンとはこないのが正直なところだ。そのため一度はお断りした今回の原稿依頼ではあるが、ピンとこないそのことにこそ千葉の演劇事情があるのではなからうかと再度の熱のこもった依頼を頂きはしたものの、関東能留氏主宰の三条会公演を観たことしか記憶に無いのも事実なのだ。勉強不足と言われても反論する気も起きないが(この姿勢に今回のテーマが潜んでいる気もするが深追いする気もやはり起きない)、その他、いわゆる演劇専用の小劇場の存在や、演劇関係者が集まる場所も当然に把握してはいない。千葉公演はあるにはあるが、どうせ演劇を見るなら東京へ、という観客は少なくないだろう。実際、観客の問題だけでなく、千葉県在住の演劇人でも、地域へのよほどのこだわりが貢献度がなければ「拠点・東京」と名乗ってしまうのが実情ではないだろうか。他の隣県でも近い演劇環境にあるのではないかと思われるが、とりわけ「首都圏の演劇界」は東京に近い故にかえって特色を出しにくくなるように思われる。かといって、千葉県独自のものが無いわけではないだろう。昨年関わった「演劇大学in千葉」でも、多くの千葉県在住の演劇人や演劇を志す方々に出会い、その高い可能性を感じた。このような協会の積極的な活動を通して、個人や団体がネットワークとして繋がり、東京の演劇の副産物ではない千葉の演劇を作っていけるのであれば、そこに「役でも」役でも買っただけだと思っている。まずは先述した「演

関西

劇大学in千葉」の今後の展開を思索しようと思ふにピンときた。

【村井雄】

2013年3月20日、「アートが拓く、あたらしい大阪。『大阪アーツカウンシル』への期待」と題したフォーラムが大阪府立江之子島文化芸術創造センターにて開催された。フォーラムは6時間に渉り行われ、最初に「アーツカウンシル」が発祥したイギリスの事例が紹介された。その後、2013年度から開始予定の「大阪版アーツカウンシル」について大阪府の担当者から報告と説明があった。そして最後に「アーツカウンシル」に詳しい有識者や大阪で活動している関係者によるシンポジウムと質疑応答が行われた。なお、この様子は動画サイト「gagoo」でも配信された。会場は大阪を中心に活動している芸術関係者で溢れており、「アーツカウンシル」に対する関心の高さを示していた。フォーラムの中で東京都や沖縄県の「アーツカウンシル」にも関わるニッセイ基礎研究所主席研究員の吉本光宏氏は「全国でアーツカウンシルがブームになっている」と語り、大阪の「アーツカウンシル」の特徴を3つ挙げた。一つ目は、大阪府と大阪市の統合事業として位置づけられていること。二つ目は、大阪府市が掲げる「都市魅力創造政策」という政策の中での位置づけられていること。そして三つ目は、他の「アーツカウンシル」と比べて予算が少ないことである。質疑応答でも、大阪の芸術文化を担う「アーツカウンシル」が少ない予算

山口

で上手く行くのかという質問が出ていた。財政難の中で「大阪版アーツカウンシル」は始まる。

【笠井友仁】

昨年度末まで高校演劇の指導に追われた地元劇団の公演を観た経験もなかった私ですが、このたび市民劇団の旗揚げに際し、地元劇団の先輩方に相談しています。山口県にも、演劇大学inしものせきをお世話くださった劇団新波を始め、長い歴史を持つ劇団が点在します。同時に練習場の確保や動員の難しさ、経済的な問題等から生まれてまもなくつぶれていく劇団も少なくないようです。

これまでも、劇団間の人材や機材の貸し借り、広報活動での協力が試みられてきたようですが、方向性の違いや車で2時間の物理的な隔たりでなかなか実現しなかったようです。しかし、多種多様な作品が集う高校演劇で他県に出向いて観劇し、教えを乞った経験を持つ私には埋められない距離ではない気がします。現在、劇団新波の赤松美花さんを中心にgagooでの情報交換、支え合う環境づくりを模索中です。毎年参加者を募るボランティア観光劇や市民参加の音楽劇などもあちこちにあり、県民の中には潜在的な演劇熱や自己表現の欲求があります。演劇を親しみやすいものに、演劇を創るため、観るため、人が集まる街を目指して、先輩劇団の皆様と共に頑張れたらと思っています。

【石田千晶】

アンケート 演出者の仕事

震災から2年、その間に震災を意識して活動してきたこと、また、周囲で感じる変化

あれから二年、東日本大震災の爪痕は今も消えない。それどころか、原発の四十年とも云われる廃炉の道も険しく遠い。そんな中、各地で演劇人の奮闘が続く。演劇をやっているからこそ、いま、なにができるのかを、自分に問い続けるのかもしれない。が然し風化が始まっているという声も聞こえてくる。そこで、今回、あえてこの質問を取り上げた。

〔編集部〕

北海道地区〈札幌〉

清水友陽（紹介者／城谷歩）

普段は札幌を中心に創作活動をしています。僕自身は、直接的に大きく生活が変化したわけではありません。

小さな変化は、歩くようになったことです。もともと歩くのは好きでしたが、より歩くようになりました。札幌市内も、たくさん歩きます。仕事で別の土地に出かけたときにも、たくさん歩きます。「エコだ」ということもあります。歩く速度で、いろいろな物を見ることが多くなりました。仕事以外でも、あちこち出かけることが多くなりました。で、いろいろな事を考えたりすることが多くなりました。作品の事を考えるときも、座りながらよりも、歩きながらの方が多くなりました。

もうひとつ、小さな変化は、家族とか、劇団の人とか、現場の子どもたちとか、自分のすぐそばにいる人たちと、話をすることが多くなりました。そして、歩きながら考えた作品を、まず自分のすぐそ

東北地区〈宮城〉

なかじょうのぶ

（紹介者／渡部ギユウ）

ばにいる人たちに観て欲しいんだなあと、思うようになりました。そうやって創作したいと、今は思っています。震災を意識して活動してきたことは、だから、歩くことです。

テレビ画面で見る限り、海岸沿岸部の瓦礫は撤去された。撤去されたサビだらけの車は、南三陸町から車で1時間30分山に入った、わが町栗原市にある。千台以上が山積みになれ野ざらしのまま。この国は何どもこんなことを繰り返してきたのだらう。野積みの山の向こうに、山肌をあらわにした栗駒山が見える。2008年岩手宮城内陸地震から5年、東日本大震災から2年。生活者であり続けることが、この地での表現者のあるべき姿のように思う。国道の整備は泊りがけで来た大企業が補修をおこなっ

ていった。利用度の高い農道は未だにデコボコのまま。その道を通って劇団員は稽古場に来る。デコボコの体感を背負って稽古をする。刻まれた記憶を通り、言葉は空間に生まれる。予測外の現実の力に対応するには、想像する心と疑う目が必要だ。劇団員は言葉を吟味するようになった。安易な言葉は苦い体でつぶやくようになった。生活者の演技術は、その土地そのものを吐き出していくしかない。

関東地区〈東京〉

外波山文明（紹介者／西沢栄治）

「震災と芝居」あれから2年。が、何も変わらない日本。むしろそれを理由に過去に戻りつつある政治。「日本を取り戻そう!」「強い日本に!」「日本を守ろう!」やたらと「日本」という言葉が強調されていく社会。今、日本、ニッポンチャチャチャ!!と叫ぶ必要があるのだろうか?オリンピックでもあるまいし……大丈夫。我々はある震災から立ち上がるエネルギーは持っている。私達の地の力だ。生きて行く力だ。きつと再生していくだろう!たとえ政治が助けてくれなくても……

でも原発事故は人災だ。そこには声を出して行かなくてはならない。

椿組は震災後6本の芝居を上演した。震災をテーマにした事はない。むしろ全く無関係の様なテーマだったりする。が、芝居の基本にあるのは、人間を描き、希望を語り、再生と生きる力を語る。それを問いかけて行く……。後はお客さんが何かを感じ、自問し、答えを出してくれ

ばいいのだ。人間100人居れば答えは100だ。そんな思いでこれからもシコシコ演じていく事だろう!!人間を愛し、人に寄り添って。

中部北信越地区〈新潟〉

井上ほーりん（紹介者／岡井直道）

実は7年前から震災を扱った作品を小さな声（裏テーマ）で発表している。瓦礫、波、魂、再生といった言葉が否応なしに浮かんてくる。

2004年10月の中越地震で自宅が半壊し1カ月に渡る車中生活を経験。その後、2007年に中越沖地震で火災の原発を（情報もなく）テレビで見て震えた。そして東日本大震災とフクシマ。

平素から原発から20km圏内はヨウ素が配給され、電源給付金が交付されているが、私の住む25km圏（直線約22km）では何の手当てもないので大声でモノ申したい。が、そうもいかない。原発だけでなく、昔から地元の発電事業が首都圏の電力を賄っていると刷り込まれている。都心部の電車を動かしているのはここで作られた電気だと。札を言われたことはないが、それが案外誇りだったりする。知り合いや同級生の家族がそこで働いていたりする。我々も生活者、大きな声を上げにくい。

7年かけて何を言えたかはわかりませんが、たとえ小さな声でもこれからも言い続けていきたい。あの日を風化させさせたくないですから。

東海地区〈名古屋〉

鹿目由紀（紹介者／ほりみか）

名古屋在住ですが、実家が福島県の会津若松市ということもあり、震災後すぐ、演出者協会のリーディングで、会津の母親と名古屋の娘の震災直後からのメールを題材にした『やり取り』を書きました。その後、地元俳優館にミュージカル『はだしのゲン』を書き下ろし、原発後の福島と原爆後の広島を接点を感じました。昨年、流山児★事務所に書き下ろしたミュージカル『イロシマ』では、大きな『揺れ』の後、気づいたら無人島にいた主婦たちの生きざまを描きました。

愛知に居て想うのは、この地域なりに震災を意識し、接点を持つとして生きる力があるという事です。それから演劇人の観点からは、震災を題材にするしなくては、震災後だからこそ純粋に『演劇の可能性』を広げていこうとするチカラが、この地域なりのベースで、存在するような気がしています。実家の方は、日常を装いながら非日常を暮らしています。まだ、なにも終わっていません。

関西地区

笠井友仁（紹介者／土橋淳志）

震災から2年が経過しました。故郷宮城県に帰るたびに私は震災を「忘れない」ことの大切さと、時には「忘れる」ことの必要性を感じています。私は2年間、ずっとあの時のことを考えて来ましたが、当時大阪に居た私ですら、そうなのですから、被災地に居た方々はきっと、もっ



と、もつと……。私が演出を務めるエイチ・エムピー・シアターカンパニーは震災後に2度、仙台公演を行いました。最初は演劇の上演なんて邪魔かも知れないと思いました。が、以前にも増して活躍している仙台的演劇人たちを見て、とても刺激を受けました。そして自分たちの作品を通じて、今、観客に何を伝えることができるのか、よく考えて作品を製作しました。また昨年、仙台で活躍する俳優と共に作品を2つも製作することができました。もちろん私だけでなく、震災後から仙台的演劇人と大阪の演劇人の交流が以前より増えました。そして今後も仙台／大阪で様々な企画が生まれそうな予感がします。震災から2年経って、私の周囲では未来へ向けて、着実に動き出しています。

四国地区

松島寛和（紹介者／門脇幸）

3月11日、僕はショッピングモールにいました。店内に設置された大型モニターで震災を知りました。呆気にとられて、そしてとても怖かった。僕の住む高知市では南海大震災が数十年の後に起こると予測されています。南海大震災の規模が大きくてうまくイメージできなかった僕には、あの映像は衝撃的なものでした。その衝撃が少し薄れて僕は具体的ないくつかのことを考えました。被災したら仕事に出ている妻とどうやって連絡を取り合うのか。稽古場から劇団員とどこへどうやって逃げるのか。とてもじゃないが、ぼくには震災があまりにも生々しくてリアルすぎます。それで劇団の何かが変わったかという何とも変

わらず、変える事ができなかったというのが正直な気持ちです。リアル過ぎる問題と直面したとき、これまで僕は演劇で向かい合う事をしてきたのだろうか。演劇に何が出来るのか。その答えがぼんやりとも見えた時に、僕たちの何かが変わるのかもしれない。

九州地区

安永史明（紹介者／山田恵理香）

それは想像力の問題かもしれないが、被災地から遠く離れたこの九州の地では、実感として震災のことを感じることは難しい。言葉を失うほどのあの日の惨状はTVを通してまるで別世界のようにも思われた。しかし、それは現実であり、多くの失われた命と失われることのない記憶が残った。

確かに、古来、僕らは自然の災害と共に生きてきた。「無常」という概念でそれらと生きてみれば共生してきたのが僕ら日本人だろう。しかし今回の災害は、それにもうひとつの災禍が加わる。言うまでもなく福島原発による人工の災禍である。

たまたま、上演していた『巷説／井尻殺人事件』の伏線に東京電力OJ殺人事件を入れた。それは原発と深く関わった事件だとして、そのパンフレットに、自然災害と人工災禍を同じ地平で解釈するなど書いた。経済的効率性が優先し、それに飲み込まれるような現代に演劇というフィールドを通して何が出来るのか。新しい倫理と規範こそ望まれるのではないかと考えている。

理事会報告

2012年9月24日（水）11時、出席者11名

和田喜夫／青井陽治／篠本賢一／篠崎光正／ふじたあさや／流山見祥／菊川徳之助／木村繁／小林七緒／瓜生正美／貝山武久

事業報告

▽演劇大学（盛岡、下関、大阪）▽演劇CAM P in 中津川▽近代戯曲研修セミナー東京▽国際演劇交流セミナーインド特集

新年度事業に関して

▽演劇大学▽国際演劇交流セミナー▽若手演出家コンクール▽近代戯曲研修セミナー▽出版・年間2012

劇場法について

▽対応を団体協議▽民間劇場問題

助成制度について

▽助成の在り方への対応協議

協会の会計について

▽かすみ総合会計に協力依頼

2012年11月6日（水）11時、出席者10名

和田喜夫／大西一郎／篠本賢一／篠崎光正／鶴山仁／菊川徳之助／木村繁／松本祐子／小林七緒／貝山武久

事業報告

▽演劇大学▽演劇CAM P in 中津川の報告▽若手演出家コンクール2012 優秀賞授賞式の日程▽日本の近代戯曲研修セミナー▽日報共同バザー5月5日▽フェニックス6回目▽忘年会▽その他

劇場について

▽青山こどもの城閉館

2012年12月29日（水）15時、出席者9名

和田喜夫／大西一郎／篠本賢一／篠崎光正／福田悦雄／木嶋茂雄／小林七緒／瓜生正美／貝山武久

事業報告

▽演劇大学▽国際演劇交流セミナー▽若手演出家コンクール 優秀賞4名 次年度からの韓国記念公演▽人事評価委員会第1回報告▽地域劇団の調査について▽その他

一般社団法人について

2013年2月13日（水）11時、出席者11名

和田喜夫／大西一郎／篠本賢一／篠崎光正／福田悦雄／木嶋茂雄／小林七緒／瓜生正美／貝山武久／渡部ギユウ／流山見祥

一般社団法人について

▽組織改編案協議▽時期協議

事業予定（2013年5月以降）

6月 演出家・俳優養成セミナー

演劇大学 in 旭川

7月 演出家・俳優養成セミナー

演劇大学 in 福島（18～21日）

国際演劇交流セミナー 台湾特集（下旬～8月上旬）

8月 国際演劇交流セミナー ロシア特集①（東京）（8～11日）

国際演劇交流セミナー 韓国特集②（金沢）（27～29日）

国際演劇交流セミナー 韓国特集③（山）（23～25日）

演出家・俳優養成セミナー2012

演劇大学 in 新潟（29～9月1日）

9月 国際演劇交流セミナー ドイツ特集（東京／福岡）（下旬～9月初旬）

日本の近代戯曲研修セミナー in 東京①（10～29日）

演出家・俳優養成セミナー

演劇大学 in 福岡（20～22日）

演出家・俳優養成セミナー

演劇大学 in 大阪（11月まで）

10月 演出家・俳優養成セミナー

演劇大学 in 中津川（18～21日）

11月 演出家・俳優養成セミナー

演劇大学 in 金沢（14～17日）

国際演劇交流セミナー ロシア特集②（名古屋）（11月中旬）

日本の近代戯曲研修セミナー in 大阪（15～12月3日）

国際演劇交流セミナー インド特集（東京）

12月 演出家・俳優養成セミナー

演劇大学 in 秋田（13～15日）

2014年

1月 演出家・俳優養成セミナー

演劇大学 in 高知（10～13日）

日本の近代戯曲研修セミナー in 東海

3月 若手演出家コンクール最終審査

コンクール記念公演

報告 一般社団法人化

日本演出者協会は6月に法人格を取得することになりました。

会員の皆様は現在の状態のまま、新団体へ移行していただけますので、ご安心ください。

なお、会費の年度が変わりますのでご注意ください。4月からはなく6月からとなりますので、法人化初年度のみ会費は14000円（2013年4月1日～2014年5月31日）になります。

広報部員 募集中

協会誌「D」の編集は、現在大勢の会員の方が協力してくださるので、原稿ができています。しかし、現在協会の事業は急増して、とても取材が追い付かない状況です。そこで、広報部では、やる気があり、広報に興味のある方を募集します。ぜひ、広報部まで問い合わせください。

部会だより

事業部

「演劇大学」の今年度下半期は10月に4年目を迎えた演劇CAMP in 中津川に始まり、12月に3年目の下関、1月に久々の札幌、2月には初めての秋田での開催、3月は3年目の廿日市での開催となりました。中津川では念願の地元参加者との時間を掛けた作品作り、また全国からの協会員による分科会が実現しました。各地でどのような演劇活動があり、また問題があるかを話し合い、知恵を出し合って現在の問題を解決してゆく大きな切っ掛けを生み出せたと感じています。「日本の近代戯曲研修セミナー」は、東海ブロック、関西ブロック、東京を実施しました。「若手演出家コンクール」は15人の演出家の作品を直接観る12月の2次審査、そこで選ばれた優秀賞の4人による3月の最終審査会、また記念公演も無事終了しました。（和田喜大）

国際部

2012年度下半期の国際部の活動としては、8月下旬に国際演劇交流セミナーのドイツ・トルコ特集（東京、大阪）、ロシア特集（兵庫）が開催され、続いて9月には、インド特集（東京）、2013年2月にフィンランド特集（大阪）が開催されました。これらの開催地は東京と関西ブロックでしたが、関西ブロックはスタッフが少人数ながらも精力的に企画運営を推し進め、セミナーを成功させました。ところで、国際部の活動ではありませんが、外部での協会員の演出によるリーディングが盛況

だったことも特記しておきたいと思います。東日本大震災以後、国内問題が山積するなか、近隣諸国との領土をめぐる問題も噴出し、演劇人としてなお一層国内外に目を向けていかなければなりません。そんななか、東京で2012年12月に国際演劇協会（I-TT）の「紛争地域から生まれた演劇シリーズ4」が行われ、協会員の深寅芥さん、鈴木アツトさんが、13年2月には日韓演劇交流センターの「韓国現代劇ドラマリーディング」で、鈴木アツトさん、明神慈さん、広田淳一さんが演出を担当しました。協会内では若手、中堅に属する彼らの演劇観がどう高まったのか、注目されることです。国際部は2013年度台湾、ロシア、韓国、ドイツ、インド特集などが予定されています。（篠本賢一）

広報部

協会誌「D」の創刊から5年が経過し、この10号が記念号として、各地に保存閲覧される運びとなり大変うれしく思っています。しかし広報部は、毎年この下半期の編集作業が協会事業の進行具合に左右され苦勞します。それは協会の様々な事業の展開が読みにくく、ページの配分が難しいのです。広報部では協会が継続する限り「D」の発行を続けたいと願い、予算的にも最小限の条件を守ってA4版20ページを維持しており、このため、時には事業数が偏り多くの事業がこの下半期に集中し、台割作業に苦心することがあり、広報部以外の会員から苦情をいただくことがありました。もちろん、現在はホームページがあり、各事業の記録は事業責任者がいくらかでも作成しWEBにアップすることが出来る状況で

法務部

法務部は新しい課題は発生しておりませんが、引き続き、演出家の権利の問題、演出料の未払いの問題、劇場法の行方について、検討、注視して行きたいと思っています。劇場法については文化庁の制度設計がはつきりしてきたら勉強会を開きたいと考えています。（西川信廣）

地域交流部

最近、2度、秋田に行き東北の演劇人たちと様々な話を話した。1度目は高校演劇の発表会の審査員、2度目は演劇大学in秋田である。それこそ年末に開催された高校演劇東北大会の審査員をやった時は「眼から鱗」であった。高校演劇は見事に現在の社会・世界を批評照射している最前線の演劇であった。そこには既成の演劇界を超える3・11以降のニッポンの演劇の現在が見事に照射されていた。が、高校演劇を終えると殆どの生徒が演劇を辞めてしまおうという！又、東北の劇団には20代の俳優が少ないという現状を聞くにつれ、今の若者たちにとって演劇は全く魅力がない職業に成りつつある事実が驚愕。

中小劇団が次々と消滅し、小ユニット化し、大手芸能プロや大手商業（公共）劇場資本による演劇の再編・商業化が進ん

でいる。全てが経済原則で語られ、ニングンの温度を持った演劇は何処にあるのだろうか？ 民間小劇場のサポート、小劇団や地域劇団、演劇を愛するひとたちの公共稽古場という演劇インフラの整備運動など今夏、一般社団法人となる演出者協会の地域交流部の課題が山積である。地道に、しかし確実に交流して変えていきたいと思います。（流山児祥）

教育出版部

教育出版は、ちょっと一息ついているところである。『海を越えた演出家たち』が刊行され、演出の仕事を経験的にとらえる作業も一区切りついた。類書のない分野であっただけに、概して好評で、『アングラ』は再販を重ねている。われわれの意図は、演出家自身の手で、失われぬうちに一時史料を活性化することだった。拾うべき二次史料はまだあるだろうが、とりあえずは、役割を果たしたというべきだろう。この上は、こうした史料を使いながら、それを客観的、批判的にとらえた通史が描かれるべきだろうが、それは次の世代に譲るべきか。それよりも我々が今すべきことは、「演出」という概念についての共通理解を、こうした二次史料も使いながら、図ることではないだろうか。演出とは何か？——体験的にしか語られていないその答えを、歴史的に、同時に実践的に、演技論と見合った形で、出すべき時に来ているのではないのか。そのために必要な議論を、シンポジウムでもフォーラムでもいいからやろうじゃないかと、理事長と語りあっているところである。（ふじたあや）

韓国現代戯曲

ドラマリーディング vol.6

2013年2月20日（水）〜24日（日）
於 東京・シアターラーム

日韓演劇交流センターが、2002年より隔年で開催しているこの企画に毎回、日本演出者協会の演出家が、協力してまいりました。今回も三人の若い演出家が韓国の現代劇に挑み、日韓演劇交流の一役を担いました。内容は以下の通りです。

◆『海霧』作：キム・ミンジョン

翻訳：宋美幸 演出：鈴木アツト
出演：林英樹（テラ・アーツ・ファクトリー）、島田静仁（青年劇場）、加藤亮佑、谷英明、吉田俊大、根本大介、狗丸トモヒロ、大西健次（イツフォーリー）、金田海鶴、水谷圭見（イツフォーリー）、保木本佳子（劇団パンと魚の奇跡）

アフタートーク 20日：鈴木アツト／林英樹（司会） 22日：キム・ミンジョン／宋美幸、鈴木アツト（司会）
【2月20日（水）19時開演／22日（金）19時15分開演】

◆『白い桜桃』作：ペ・サムシク

翻訳：木村典子 演出：明神慈
出演：下総源太朗、小山明子（エンパシ）、中島愛子（オフィスPSC）、高橋智哉、永井秀樹（青年団）、宮山知衣（テアトル・エコー）、土井通肇（元祖演劇之素いき座）、宮崎雄真、中島美紀、トシバウロン

アフタートーク 21日：明神慈、小松杏里（司会） 23日：ペ・サムシク／木村典子、明神慈（司会）
【2月21日（木）19時開演／23日（土）14時開演】

◆『朝鮮刑事ホン・ユンシク』作：ソン・ギウン

翻訳：浮島わたる 演出：広田淳一
出演：伊東沙保、稲垣千城、今村沙緒里、小野智敬、笠井里美、祁答院雄貴（アクトレイ）、中村万里、西村俊彦（マック・ミック）、本家徳久

アフタートーク 23日：広田淳一、ソン・ギウン、津川泉（司会）
【2月23日（土）19時開演／2月24日（日）14時開演】

◆シンポジウム「日韓演劇交流の現在」

キム・カンボ／ソン・ギウン／松本祐子、坂手洋二（司会）
【2月24日（日）17時】

主催：文化庁、日韓演劇交流センター
提携：（財）せたがや文化財団、世田谷ハリックシアター、後援：駐日韓国大使館、韓国文化院、世田谷区、助成：日韓文化交流基金



新入会員紹介

(12年8月12日12月入会)

石田千晶 (いしだ・ちあき)

市民劇団キラリ☆三
主宰。▼平成8年山
口県立華陵高校で舞
台芸術部創部以来
産休・育休、闘病で断続的にしか演劇指
導に関われない中、部員たちとの試行錯
誤を評価していただき、創作劇にのめ
り込みました。▼平成13年『ぼくんち』
平成17年『報道センター123』全国高
校演劇大会優秀賞、平成23年『カツッ!』
同大会最優秀賞。▼育児も闘病も一段落
し、演劇指導に没頭できるといった矢先
演劇部のない高校に異動。演劇への思い
は抑えられず、演劇大学に参加。そこで
和田理事長や演劇部出身の若者達の熱さ
に触れ、演劇での街おこしを考えました。
Uターンした教え子たちや地元の演劇
ファンの賛同を得て、このたび市民劇団
を旗揚げしました。

大橋宏 (おおはし・ひろ)

舞台演出家。▼劇団
DA・M、アジア
現代演劇交流活動
＜Asia meets Asia＞
オルタナティブスペース＜プロト・シア
ター＞代表。▼1978年『早稲田』『新
劇場』旗揚げ。古典戯曲を現代的再構成
する作品にて、野外、ライブハウス等で
の公演活動を行う。▼1986年DA・
M設立。＜プロト・シアター＞を拠点に
ジャンル・国籍を超えたアーティストたちと実験的共同作業を精力的に展開。▼
近年は、ヨーロッパ・アジアでのフェス
ティバル招聘参加とともに、身体的な即
興行為を組織化しながら、生を喪失する
現代社会を批判する作品づくりを進める。
また1997年より＜A・M＞を開始。
東から南西中央アジア17地域の演劇人達
を招聘しフェスティバル開催や共同創作
活動を継続している。

勝俣美秋 (かつまた・よしあき)

劇団わらく代表。▼
2004年に劇団
わらくの前身とな
る『芝居工場わらく』
を立ち上げ、主に千葉、東京で活動を
開始。▼2007年、東京国際芸術祭
リージョナルシアター・シリーズ部門に
選出。劇団としての活動を一時中断。▼
2010年、新しいメンバーを集め、劇
団わらくと改名し活動を再開。劇団わら
く公演、全作品の演出を手掛ける。▼主
な演出作品、▼『マクベス』(作・ウィ
リアム・シェイクスピア)▼『初恋』(作・
土田英生)▼『第32進海丸』(作・蓬萊
竜太)▼『おとこたちのそこそこ』(作・
とこのこと) (作・鈴江俊郎)、など。

金澤菜乃英 (かなざわ・ななえ)

劇団青年座所属。▼
2010年、多摩美
術大学映像演劇学科
卒業。▼2012年、

島村哲平 (しまむら・てっぺい)

新潟県新潟市で活動
する演劇集団NAI
の代表。▼今まで20
年近く役者は続ける
も演出は去年の12月森鷗外『高瀬舟』が
初。公民館の和室という空間を使い、ど
ういった世界を作れるか実験的に公演
した。▼演出活動はまだまだこれから
経験を重ねねあられ空間での表現に挑
戦していきたいと思っています。▼役
者としては新潟市の地域雑誌の演劇賞
2008、2009、2012年の主演男
優賞を受ける。▼今年の待ちに待った『演
劇大学』新編開催。微力ながらしっかり
働きますのでよろしく願います。

千島芳彦 (ちしま・よしひこ)

進化する究極プロ
ジェクト所属。▼野
溝さやか(日本演出
者協会所属)とともにに劇団PRO-PROMを旗揚げ。▼後に同
氏と進化する究極プロジェクトを立ち上
げ、俳優として活動。▼現在は長野県松
本市の私立高校にて演劇部の指導にあた
る。▼私はもっぱらの俳優でありまして
恥ずかしながら演出の経験はせいぜい演
出助手や高校演劇程度です。まだ胸を
張って演出作品と言えるものはまだあり
ません。ですのでこのような歴史ある会
に参加させていただいて大変恐縮してお
ります。若輩ではありますが、これから
ご指導のほどよろしくお願い致します。

山口望 (やまぐち・のぞむ)

演劇企画室ベクトル
代表。▼結成15年
目を迎えるベクトル
のみならず外部公演
やプロデュース公演など演出(30本位)。
▼2009年度からは広島市東区民文化
センター舞台芸術促進事業として共催の
公演を行う。▼2013年度から同セン
ター提携芸術団体に昇格。▼2014年
2月8・9日同センターにおいて、第17
回公演予定。また、定期公演の無い夏場
は他団体とのコラボレーション企画や、
ライフワークである演劇祭などを開催し
ており、年間二本柱の公演がここ数年の
状況である。▼代表作は広島市文化財団
演劇引力廣島修了公演『いまわのきわ』
(2003)。▼演出家としてのモットー
は「ベタでいいんだ、ベタがいいんだ」。

日本演出者協会

協会の事業担当
(2013年4月現在)

【理事長】和田喜夫

【副理事長】宮田慶子、流山児祥

【理事】青井陽治、鶴山仁、大西一郎、菊川徳之助、木嶋茂雄、木村繁、鴻上尚史、小林七緒、坂手洋一、篠崎光正、篠本賢一、西沢栄治、西川信廣、深津篤史、ふじたまき、松本祐子、山田恵理香、渡部ギユウ

【(部) 部長・担当理事・部員】

【事業部】小林七緒・青井陽治、鶴山仁、菊川徳之助、木村繁、坂手洋一、篠崎光正、宮田慶子、流山児祥、木嶋茂雄、外波山文明、林英樹、松森望、関西井之淳、金子順子、木嶋茂雄、田中孝弥、棚瀬美幸、松平淳、森本景文、山口浩章、芳川雅男、東海鹿目由紀、菊本健郎、齊藤敏明、竹内菊、はせひろ、トリエウスケ、熊本、亀井純太郎、山南純平、(仙台)渡部ギユウ、札幌清水友陽

【国際部】篠本賢一・青井陽治、鶴山仁、貝山武久、坂手洋一、堀江のゆき、松本祐子、大橋宏、金田淳、グイクル・ニジリスコ、小林拓生、佐川大輔、佐々木治、左藤慶、杉山剛志、中野志朗、長谷川直輝、林英樹、洪明花、前嶋のの、松森望、森井睦、(北陸)岡井直道、(関西)井之上淳、坂手登美、島守辰明、全リシダ、田中孝弥、棚瀬美幸、土橋淳志、山口浩章、(東海)佐久間広一郎、(ほりみか)丸知亜矢、本島、(仙台)伊藤みゆ

【広報部】篠崎光正・菊川徳之助、篠本賢一、流山児祥、(東京)秋葉由美子、大杉良、小川巧治、朗、桑原秀一、鈴木美恵子、林未知、平尾麻衣子、三谷麻里子、緑川憲仁、(関西)木嶋茂雄、田中孝弥、(東海)ほりみか、(新潟)井上ほりりん、(京都)松宮信男、(福岡)糸山裕子

【教育出版部】坂手洋一・青井陽治、鴻上尚史、ふじたまき、流山児祥、(東京)佐々木治、【法務部】西川信廣・鶴山仁、小林七緒

【地域交流部】流山児祥・鴻上尚史、深津篤史、山田恵理香、渡部ギユウ、熊本村上精一、(東海)水野誠子、(仙台)なかにじょうのぶ

【観劇案内】(東京)遠藤栄蔵、(関西)木嶋茂雄、(東海)金子康雄

【日韓演劇交流センター委員】小松杏里、松本祐子

【監事】福田悦雄、(関西)栗田倫子、今泉おさむ、【評議員】内山鶴、瓜生正美、貝山武久、栗山民也、中村孝夫、福田善之

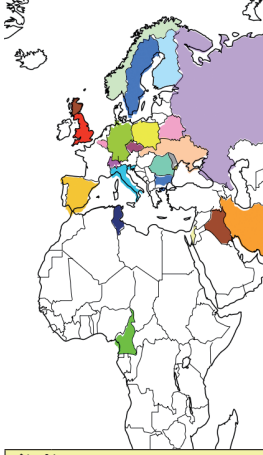
【事務局】大西一郎

【副事務局】篠本賢一、齊藤由夏

【事務局】(東京)上田郁子、秋葉舞蓮子、藤原薫、(関西)木嶋茂雄、(東海)金子康雄

データに見る国際演劇交流セミナーの歴史

ノルウェー	
2010	レーネ・テレセ・ティゲン〈劇作家〉
スウェーデン	
2002	ユールック・サファカ〈演出家〉
フィンランド	
2010	ヘイニ・ヌカリ〈ダンサー〉
2013	ユハ・メケラ〈俳優、演出家〉
スコットランド	
2002	ジェームズ・プライニング〈演出家〉
イギリス	
2000	アーノルド・ウェスカーク〈劇作家〉
2008	スティーブン・ワッソン〈演出家〉、 コリン・スウム〈俳優〉
ベルギー	
2009	大熊座カンパニー
2010	グルボフ
ドイツ	
1999	クラウス・マイヤー〈演出家〉、 ヨアヒム・ヘルツ〈オペラ演出家〉
2002	ハンス＝ティース・レーマン〈演劇学〉
2003	マンフリート・カルゲ 〈俳優、演出家、劇作家〉
2005	ハンス・ヴェーバー〈演出家、俳優〉
2008	ヘレーナ・ヴァルトマン〈演出家、 振付〉、リズレビ〈演出家〉、ローラント・ コーベルク〈ジャーナリスト〉
2009	エンリコ・シュトルツェンブルク 〈演出家〉、フォルカール・ヴィヒ 〈劇作家〉
2010	アレクシス・ブーク〈演出家〉
2012	ヌルカン・エアブラット〈演出家〉 〈トルコ〉
チェコ	
2002	ペトル・マターセク〈美術家〉
ポーランド	
2007	ゴジジエシュ・スタニエフスキ〈演出家〉
2011	テアトル・シネマ
ペラルーシ	
2005	ポリス・ルツェンコ〈演出家〉
モルドバ	
2000	
2010	ペトル・ブトカレウ〈俳優、演出家〉
2012	
ルーマニア	
2009	アレキサンドル・ダリエ〈演出家〉
ブルガリア	
2001	ディミタール・ステファノフ 〈俳優、演出家〉、 ニッキー・ソティロフ 〈俳優、パントマイミスト〉
スイス	
2011	エリック・デヴァンテリー〈演出家〉
イタリア	
2001	井田邦明〈演出家〉
2006	テレーサ・ルドヴィゴ〈劇作家、演出家〉
スペイン	
2003	アンドレウ・カランデル＝ゴッシェウ 〈劇作家、演出家、俳優〉（カタルーニャ）
チュニジア	
2000	レイラ・タベル〈演出家、俳優〉
カメルーン	
2000	サミュエル・ヌフォール・ングワ 〈演出家、俳優〉

ウクライナ	
2002	アンドリー・ゾルダック〈演出家〉
2008	
イスラエル	
2002	ルティ・カネル〈演出家〉
2004	モニ・ヨセフ〈演出家、俳優〉
2007	ルティ・カネル〈演出家〉
イラン	
2003	アッティラ・パシャニニ〈演出家〉
イラク	
2003	ファレス・アル・マシュタム〈演出家〉
2004	ムハンマド・シャキル〈演出家、俳優〉ほか
	
インド	
2003	ロイスタン・アベル・バウムク〈俳優〉
2012	プロビール・グハ〈劇作家、演出家〉
バングラデシュ	
2000	マジェンタ〈演出家〉
2003	カマルツェン・ニル〈演出家〉
タイ	
2002	ナルモル・タマボックサ〈パフォーマー、演出家〉
2004	ジャム・ルービン〈演出家〉
2012	プラディット・プラサートン〈俳優〉
マレーシア	
2000	ホセ・ドライマ〈演出家、劇作家〉、黄愛明〈俳優〉
2002	黄愛明〈俳優〉
2005	リャオ・ブイティン〈劇作家、俳優〉、ジョー・クカサス〈劇作家、演出家、俳優〉
シンガポール	
2000	ブトゥ・ウイジャヤ〈劇作家、演出家〉
2003	トニー・ブルール〈俳優〉
インドネシア	
2000	ブトゥ・ウイジャヤ〈劇作家、演出家〉
2003	トニー・ブルール〈俳優〉
フィリピン	
2002	ジャック・アブット〈俳優、ダンサー、演出家〉、マリベリ・ガルタ〈演出家〉、ラクエル・デ・ロラ〈メディアアーティスト〉

ロシア

1999	レオニード・アニシモフ〈演出家〉
2001	アレクサンドル・カリャギン〈俳優〉
2002	レオニード・アニシモフ〈演出家〉
2004	ヴァレリー・ガレンデーエフ 〈俳優トレーナー〉
2005	ヴァレリー・ガレンデーエフ 〈俳優トレーナー〉
2011	アレクセイ・アレクセーヴィチ・ ベセゴフ〈演出家〉、 スベトラーナ・ラマノワ〈美術家〉 オリガ・スメホワ〈俳優〉
2012	ミハイル・ヤコヴレヴィチ・アリ フセイン〈俳優、演出家〉

中国

1999	林兆華〈演出家〉
2001	朱旭〈俳優〉
2002	查明哲〈演出家〉
2003	林兆華〈演出家〉
2006	劉深〈劇作家〉、張先〈演劇指導者〉
2007	李六乙〈演出家、劇作家〉、 呂涼〈演出家、俳優〉、宋憶寧〈俳優〉
2011	吳曉江〈演出家〉

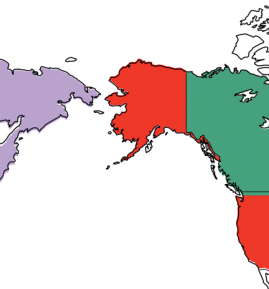
台湾

2000	スタンレイ・センチュアン〈演出家〉
2002	ビスイ・チイウ

オーストラリア

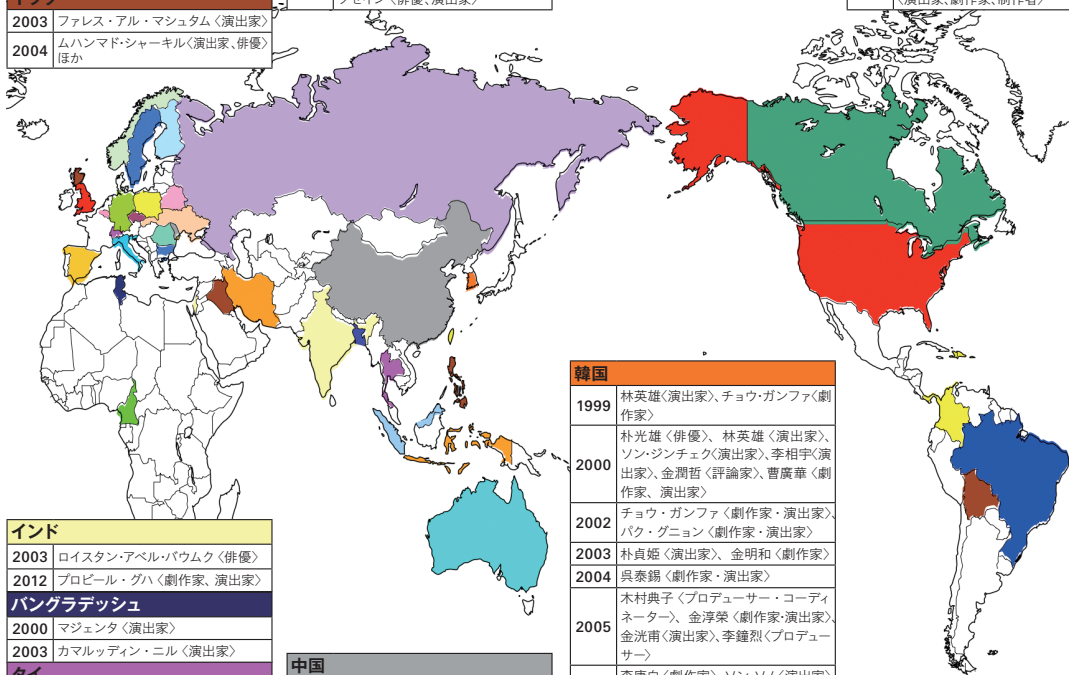
1999	オーブリー・メロー〈演出家〉、ジョ アンナ・マレー・スミス〈劇作家〉
2000	ウェズリー・イノック〈劇作家、演出家〉
2001	ダニエル・キーン〈劇作家〉
2005	
2006	シンペリン・ビューラー〈劇作家、演出家〉
2007	

アメリカ	
1999	ジェイムズ・レヴェレット〈評論家〉
2003	デボラ・アン・ディスノー 〈プロデューサー、映画監督、 演出家、脚本家、俳優〉



韓国	
1999	林英雄〈演出家〉、チョウ・ガンファ〈劇作家〉
2000	朴光雄〈俳優〉、林英雄〈演出家〉、 ソン・ジンチュク〈演出家〉、李相宇〈演出家〉、 金潤哲〈評論家〉、曹廣華〈劇作家、演出家〉
2002	チョウ・ガンファ〈劇作家・演出家〉 パク・グニョン〈劇作家・演出家〉
2003	朴貞姫〈演出家〉、金明和〈劇作家〉
2004	呉泰錫〈劇作家・演出家〉
2005	木村典子〈プロデューサー・コーディネーター〉、 金淳榮〈劇作家・演出家〉 金光甫〈演出家〉、李鍾烈〈プロデューサー〉
2006	李康白〈劇作家〉、ソン・ソノ〈演出家〉 全勲〈演出家〉
2007	ソン・ジンチュク〈演出家〉、朴根亨〈演出家、劇作家〉
2008	ソン・ジンチュク〈演出家〉、 キム・ソンニョク〈俳優〉
2009	李潤澤〈演出家〉、ヤン・ジョンウン〈劇作家、演出家〉
2010	
香港	
2002	アーヴィン・チエン〈ディレクター〉
2007	鄧樹榮〈演出家〉
2008	エンディン〈劇作家、演出家、俳優〉

ナ・マレー・スミス〈劇作家〉、



編集後記

▼協会誌「D」が創刊から10号5年経ったのが素直に嬉しい。思えば最初の対談は故成井市郎氏と坂東玉三郎氏の珠玉の組み合わせで、しかも今は無い建て替え前の歌舞伎座真砂室での対談であった。それから5年間、協会は急成長し今年6月一般社団法人に組織換えを計画。今後は公益社団法人も視野に入れた新たな経営になるだろう。広報部も全国の会員に役に立つ情報を届けるとともに会員相互交流に役立つ事業展開を願う。

（篠崎光正）

▼国際演劇交流セミナーの歴史をまとめてみた。十数年に亘る世界の演劇人との交流、あらためてその多彩さに驚かされる。創刊から5年、Dもついに10号となる。2年前には東日本大震災があり、地震、津波、そして、原発事故が重なって大惨事となってしまった。さて、5年後の20号が出る頃、世の中はどうなっているのだろうか。

（篠本賢一）

▼コンクールを取材していて、優勝して泣きそうな人と優勝できなくて泣きそうな人を見ると私も泣きそうになります。来年も楽しみです。（三谷麻里子）

（大杉良）

▼ふだんの芝居づくりの現場では、たくさんの俳優と顔を突き合わせていますが、演出家は自分一人であることがほとんど。広報誌づくりのお仕事を通して出会う、たくさんの演出家の言葉や声は、果てしない演劇の多様性をあらためて見せつけられます。相変わらず面白い集団だと思います。（緑川憲仁）

（緑川憲仁）

▼今までは読む側だった「D」ですが、記念すべき10号から作り手側のお仲間に入れていただきました。舞台とはまた違った「モノを作る」作業を、先輩方と一緒に楽しんでいけたらと思っています。よろしくお願ひします。（秋葉由美子）

（秋葉由美子）

▼編集部員として新たに秋葉由美子さんが仲間に加わりました。よろしくお願ひいたします。

（広報部一同）